

大学礼拝  
説教集

第 16 号



2012

東北学院大学

## 表紙の絵について

土樋キャンパスのラーハウザー記念礼拝堂は、1932(昭和7)年3月に完成しましたが、この時に当時としては北日本初となるパイプオルガンも礼拝堂内に設置されました。このオルガンは、現在は使われておらず、講壇向かって右側に当時の形のみとどめています。今回の表紙の写真は、講壇向かって左側の現在使われているオルガンです。このオルガンは、パイプ総数2525本、ストップ総数45個、ドイツのベッケラート社製のネオ・バロックスタイルの楽器で、1978(昭和53)年に設置されたものです。

大学礼拝

# 説教集

第 16 号

2012

東北学院大学

# 目次

巻頭言	宗教部長	佐々木哲夫	5
いちばん偉い者	理事	平河内健治	7
一匹の迷える羊	常任理事	宮城光信	13
東北学院崩壊の危機	学院長(大学長)	星宮望	19
豊かな他者感覚	仙台松陵教会協力牧師	深田寛	25
無条件・無制限の愛に育まれて	東北学院中学校・ 高等学校宗教主任	松井浩樹	30
神の言葉を聴く心	東北学院櫛ヶ岡 高等学校宗教主任	西間木順	36
主を待ち望む	宗教部長	佐々木哲夫	41
逆転した立ち位置	大学宗教主任	永井義之	49
砂漠で祈るキリスト	大学宗教主任	野村信	54
主の祈り	大学宗教主任	佐々木勝彦	60

私はここにいます

お言葉どおり、この身に成りますように

豊かな世界への招き

人生を変える出会い

神への問い

良い実

キリストの救いと裁き

復興の担い手

「あちら側」からの視線

父のつくったネギです

声の大きさと正しさ

ある日の音楽礼拝

ENGLISH CHAPEL SERVICE

大学宗教主任

大学宗教主任

大学宗教主任

大学宗教主任

総合人文学科長

経営学部教授

経営学部教授

法学部准教授

経営学部准教授

工学部准教授

工学部教授

教養学部教授  
大学オルガニスト

文学部教授

北博……………65

出村みや子……………71

村上みか……………77

原田浩司……………83

原口尚彰……………89

保坂和男……………94

佐藤邦廣……………99

横田尚昌……………104

松村尚彦……………110

長島慎二……………115

星宮務……………120

今井奈緒子……………125

D・N・マーチ……………134

編集後記

大学宗教主任

北

博  
……  
……  
……

## 巻頭言

### 「東北学院が担う二重の使命」

宗 教 部 長 佐々木 哲 夫

二〇一一年三月一日、東北学院大学も東日本大震災に見舞われた。キャンパス建物の被害だけでなく沿岸地域に建っていた東北学院シーサイドハウスが崩壊するなど、被害は甚大だった。災害対策本部を設置し安否確認を行い、東北学院七百名ほどの教職員全員の無事を確認したが、一万五千名ほどの園児生徒学生のうち生徒二名と学生五名が犠牲や行方不明となった。家族の犠牲や家屋の流失損壊浸水などの被害に遭った者も少なからずいた。校舎は復旧工事によって以前の姿を取り戻したが、建学の理念に関しては、なぜこのような災厄が起きたのかとの問いが教職員の心に生じたことであろう。ヨブのように不条理をどう理解するかが東北学院に問われたのである。

災厄に見舞われたヨブの困惑は深刻だった。なぜなら、ヨブも友人たちと同じく因果応報の価値観に従っていたからである。災厄の原因である罪を自分のうちに見出せないヨブは、悔い改めができない行き詰まりに直面したのである。神はいたずらに災厄をヨブに下したのか。ヨブは究

極の不条理に困惑した。ところで、苦悩の青春時代を生きた国際政治学者の姜尚中氏は、アウシュビッツを生き延びたユダヤ人精神医学者ビクトール・フランクルの考え方「人は誰しも不条理を抱えて生きている」に出会い、特に、「人生から何を期待できるかが問題なのではなくて、人生が我々に何を期待しているかが問題である」の言葉に共感を覚えたという。ヨブの言葉に戻るならば「あなたのことを、耳にしてはおりました。しかし今、この目であなたを仰ぎ見ます。それゆえ、わたしは塵と灰の上に伏し、自分を退け、悔い改めます」(ヨブ四二・五〜六)と共鳴する境地に到ったのである。不条理に屈するのではなく、神と共に生きることによって人生の意義を見出すとの価値観によって、彼は不条理を克服したのである。

東北学院大学は、四月一八日、追悼礼拝から始まる教職員全体集会「東北学院大学の復興に向けた全学の集い」を開催した。その集会において、これまでの東北学院の歴史と伝統に留まる決意、すなわち、神と共に歩むことが再確認されたと考ええる。礼拝と一体であることを前提とするキリスト教学校の営みが危機的状況においても堅持されたのである。学校から何が与えられるかと期待するのではなく、自分は学校に何を為すことができるかと考える雰囲気に含まれたのである。震災によって、東北学院一二五周年の歩みはさらに確かなものにされたのである。本『説教集』が東北学院の理念を証するものとして用いられることを祈念している。

# いちばん偉い者

理事長 平河内 健治

ルカによる福音書、第九章四六〜四八節

46 弟子たちの間で、自分たちのうちだれがいちばん偉いかという議論が起きた。47 イエスは彼らの心の内を見抜き、一人の子供の手を取り、御自分のそばに立たせて、48 言われた。「わたしの名のためにこの子供を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。あなたがた皆の中で最も小さい者こそ、最も偉い者である。」

ルカによる福音書、第二章二四〜三十節

24 また、使徒たちの間に、自分たちのうちでだれがいちばん偉いだろうか、という議論も起こった。25 そこで、イエスは言われた。「異邦人の間では、王が民を支配し、民の上に権力を振るう者が守護者と呼ばれている。26 しかし、あなたがたはそれではいけない。あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者のようになり、上に立つ人は、仕える者

のようになりなさい。27 食事の席に着く人と給仕する者とは、どちらが偉いか。食事の席に着く人ではないか。しかし、わたしはあなたがたの中で、いわば給仕する者である。28 あなたがたは、わたしが種々の試練に遭ったとき、絶えずわたしと一緒に踏みどまつてくれた。29 だから、わたしの父がわたしに支配権をゆだねてくださったように、わたしもあなたがたにそれをゆだねる。30 あなたがたは、わたしの国でわたしの食事の席に着いて飲み食いを共にし、王座に座ってイスラエルの十二部族を治めることになる。」

この夜間主礼拝では只今お読みいたしました二箇所を神様から今夕与えられた御言葉と信じて、神様のメッセージに耳を傾け、皆さんと共に考えてみたいと思います。ここには弟子達の間で誰がいちばん偉いかという議論があつたことが記されています。両方に「いちばん偉い者」という小見出しがついています。

二二章の方から先に考えてみたいと思います。ここでの議論はイエスが十字架にかかる直前の最後の晩餐の席上で起きたものでした。弟子達はイエスの死後の聖餐の記念式の指導まで受けていたにもかかわらず、自分達の中から裏切り者が出るといふ仲間内の人間関係に囚われてしまい、イエスが何故に死ななければならぬかに今は思い至っておりません。直前の一九節から二三節

ままでにこう記されています。「<sup>19</sup>それからイエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えて、それを裂き、使徒たちに与えて言われた。『これは、あなたがたのために与えられるわたしのからだである。わたしの記念としてこのように行ないなさい。』<sup>20</sup>食事を終えてから、杯も同じようにして言われた。『この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である。』<sup>21</sup>しかし、見よ、わたしを裏切る者が、わたしと一緒に手を食卓に置いている。<sup>22</sup>人の子は、定められたとおり去って行く。だが、人の子を裏切る者は不幸だ。』<sup>23</sup>そこで使徒たちは、自分たちのうち、いつたいだが、そんなことをしようとしているのかと互いに議論をし始めた。」

そして、この後に、自分たちのうちでだれがいちばん偉いだろうかという議論も起こったと今読んだ二四節以降に記されています。イエスの死後自分達が迫害に遭うかもしれないという危機感やそのための心の準備をするという気持ちは一切なかったと言えます。

今回の震災で、「樂觀バイアス」ないし「正常性バイアス」英語では *normalcy bias* という「災害や事故は他人に起こっても自分の身に降りかかる確率は少ない」と考える傾向があることが災厄の反省として注目されました。「正常性バイアス」による災害への被害を抑制してしまった人間の心理状態から、不幸にして、逃げ遅れたりより安全な場所に移動しなかったり、一旦避難した後で片付けに戻り第二波で被災を受けた方が残念ながらかなり多くおられたとの分析があります。

一種の自己愛（ナルシズム）で、平常時は心の安定や安心感に通じる心理状態であり私たちのこころの安定を保つために大切な心理状態ですが、危機のときにはマイナスに働く場合があることが示されました。

私の義理の弟は多賀城のソニーに派遣されていましたが、津波が押し寄せる中、車の渋滞につきまわり、車を捨て、辛くもある家の二階のベランダに逃げ込み命が助かりました。話を聞きますと、逃げる途中で、渋滞で動けなくなった車の運転席の若い女性から「逃げた方がいいのでしょうか？」と声をかけられたそうです。急いで車を捨てさせ一緒に必死で逃げたという話でした。「正常性バイアス」とパニック状態がその女性を自力では動けないようにしていたのかもしれませんが。

弟子達もまた「正常性バイアス」状態であったのかもしれませんが。民衆や弟子達を現に力強く導いているイエスの死は受け入れ難いものであったのでしょうか。認めたくなかったものでした。それは、イエスが二度もご自身の死と復活を予告しているにもかかわらず、二度目の予告の後でも「自分たちのうちでだれがいちばん偉いかという議論が起きた」と、これも今読んだ「ルカによる福音書」の第九章四六節に記され、その前の四四節以下にはこう記されているからであります。「イエスは弟子たちにこう言われた。」<sup>44</sup> 『この言葉をよく耳に入れておきなさい。人の子は人々の手に引き渡されようとしている。』<sup>45</sup> 弟子たちはその言葉が分からなかった。彼らには理解でき

ないように隠されていたのである。彼らは、怖くてその言葉について尋ねられなかった。」弟子たちは自分たち仲間内の人間関係に、より関心をもっていました。誰が一番弟子のリーダーとして先生に認められるかが、より問題となっていました。このことがイエスの言葉を聞いても聞かずの状態にしております。

人間の共同生活の秩序を保つには、どうしても責任や権限の分担が必要であり、そのための命令系統が重視されます。危機的状況以外では、これを守るのが秩序を維持するためには必要なことです。上位の地位にある者が常識的には偉い人です。しかし、これらに余りに執着しすぎるとイエスの弟子たちのように物事の本質を見失ってしまいます。

イエスは「ルカによる福音書」の第九章の四七節以下では、一人の子供の手を取りご自分のそばに立たせ「わたしの名のためにこの子供を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。あなたがた皆の中で最も小さい者こそ、最も偉い者である」と述べます。一二章では、一番偉いとされる人は「いちばん若い者のようになり」、社会的の上に立つ人は「仕える者のようになりなさい」と教えています。食事の席で給仕する人の立場でお客様である隣人をもてなさないと言っています。

子供のように誰かに依存せざるを得ない社会的には小さい者の立場にある人を虐待したり、暴

行を加えたり、苛めたりすることは本当に偉い人のやることではなく、最低の人間のすることであるということになります。本当に偉いということがどのようなものかを知らない、人間の生き方の本質を失い、ルール違反さえ起こし、愛のない暗い一生になります。イエスは人間関係での権力欲や名誉欲を超えて、小さき者を愛し、隣人に仕える人になります。それが本当の幸せに通じる道なのです。

名誉や権力の虜になりがちなわたし達ですが、神様への礼拝を通して、日々自分の姿を知り、神様の教えを聞き、自己抑制を図り続けたいものと思います。

## 「二匹の迷える羊」

常任理事 宮城光信

マタイによる福音書、第一八章一〇～一四節

10「これらの小さな者を一人でも軽んじないように気をつけなさい。言っておくが、彼らの天使たちは天でいつもわたしの天の父の御顔を仰いでいるのである。12あなたがたはど  
う思うか。ある人が羊を百匹持つていて、その一匹が迷い出たとすれば、九十九匹を山に  
残しておいて、迷い出た一匹を捜しに行かないだろうか。13はつきり言っておくが、もし、  
それを見つけたら、迷わずにいた九十九匹より、その一匹のことを喜ぶだろう。14そのよ  
うに、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない。」

今日の聖書の箇所は、太字の見出しにありますように、『迷い出た羊』のたとえ』として有名  
なところで、皆さんはこれまでに何度も聞いたことがあるかもしれません。羊は弱い動物です。  
もし、迷ったまま夜を過ごすとな命を失う危険があります。さらに、迷った羊は、自分で帰る道を見  
つけることが出来ません。羊を捜し、見つけてくれるのは羊飼いです。羊飼いは失われた

一匹の羊のことをいかに大切に思っておられるか、そしてその一匹が探し出されて群れへと帰ることができるを心から願っているというのです。聖書のこの箇所は、イエス様は、この迷える一匹の羊を、迷える人間私達一人一人に、そして羊飼いは私達の罪のために十字架にかかり、よみがえられた主イエス・キリスト、神様そのものであると教えておられるのです。

ところで、この箇所を一読して見ますと、一つの疑問が生じるように思います。それはこの羊飼いは一匹の迷える羊を大事にするあまり、残された他の九九匹が危険にさらされることを考えていないのではないか。そしてまた、羊の集団から一匹、また一匹と迷い出て行くかもしれないということを考えていないのではないか、ということへの疑問です。もつと広げて考えれば、それは大多数を犠牲にしても、全くの少数のことだけを大事にしているのではないかという疑問です。しかし聖書をよく読みますと、当時の人には、「九九匹を山に残しておいて迷い出た一匹を探すのは当たり前のことである」と理解されているということです。これは大きな不思議な価値観の違いであると思われるかもしれませんが、必ずしもそうではありません。実はこれは本当に当たり前のこととして受け入れられるべきことなのです。それは、歴史的な当時のことを知らなければなりません。当時、羊の多くは個人の所有物ではなく、共同の所有物として村に所属するも

のでありました。また、大きな羊の群れには通常二、三人の羊飼いがついていましたので、九九匹を残しておくことが出来たのです。だからこそ、羊飼いの一人は神に捧げることの出来る大事な大事な迷った一匹の羊を見つけ出すまで探すことができたのです。ですから、私達は聖書のこの箇所を純粹に、九九匹の羊とその世話をしている羊飼達、一匹の迷える羊とそれを探し出している一人の羊飼い、という事で聖書の意味するところを学んでいけばいいのです。迷い出た羊も羊飼いのもとにあり、その他の九九匹の羊も羊飼いのもとにあるのです。

イエスキリストは羊飼いです。迷い出たたった一人の人をもおろそかにされることなく、その存在を覚えて探し出してくださる方です。私達がどんなに小さな存在であったとしても、人が誰一人自分に目をとめてくれず、寂しい中にあり、迷い、悲嘆にくれ、悲しみ、自分の気持ちや思い・主張を認めてくれなかったとしても、一人ももれることなく、その存在を大切に思ってくださいなのです。そして私達一人一人の訴えに耳を傾けて心配してくださる救い主なるキリスト、創造主なる神様がおられるというのです。

私達人間は弱く、迷いやすい者です。その迷いは青年期の学生の皆さんには多くあります。今

皆さんはまさに将来への人生の大きな転換の時で、自分自身に関して悩み、将来に悩み、人間関係について悩み、悶悶として時を過ごすことが少なくないでしょう。青春の時期だからこそ、その迷いも深くあります。自分自身の問題だけではなく、他人との関係をスムーズにしなければならぬという、難しさにも対応していかなければなりません。社会の状況は驚くほど、加速度的なスピードで変化し、進んでいます。皆さん方はそのスピードに対応していかなければなりません。あるいは対応するのが困難かもしれません。そしてまた今日の時代は、先が見えず、不安で「迷いの時代」とも言われています。今までは予想もできないような大きな事件、事故、災害が矢継ぎ早に起きています。一〇〇〇年に一度と言われる大震災も経験し、まだその復興の途中段階でもあります。一つ一つの出来事の意味をゆっくり考え、対処するのが難しい時代になってきています。私たちもこのような中で、どのように生きていったらよいのか分からなくなりそうです。

私達の人生には岐路があります。その際の選択は自由意志によって行われます。全くの自由に基づく選択がいつも可能です。聖書の言葉を自分自身と全く関係のない言葉として聞き流すのも一つの選択ですし、また聖書の言葉の只中に自分自身を置くのも一つの選択です。迷っている子羊は実は自分自身のことではないかと思い、自分のことと関係付けて考えるかどうかによって、

私達の人生に大きな差が出ると思います。いついかなる時であつても、私達一人一人を見てくださる方がいらつしやり、私達が迷い、失意の中にある時に、私達の心の中を見通し、ケアしてくれる方がおられるというのは、本当になんと心強く、幸せなことかなと思います。

イエス様は、「私は道であり、真理であり、命である」と宣言されています。生きる源の命を私達に与え、子羊のように迷うことの多い私達に道を示し、何が真理であるかの判断基準を私達に示し、将来に向かつての確かな希望を与えてくれるのがイエス・キリストなのです。このことを是非、心に留めていただきたいと思います。そして、もし皆さんが九九匹の羊に属しているのであれば、迷える一匹の小さな羊に目を留めていただきたいと思います。

皆さんは善きサマリア人のお話をご存知でしょう。それは傷ついて、誰にも面倒をみてもらえず苦しんでいる人を手厚くみてくれた、一人のサマリア人の物語です。また、「善きサマリア人の法」(Good Samaritan law)というのがあることをご存知でしょうか。それは、「災難に遭つたり急病になつたりした人など(窮地の人)を救うために無償で善意の行動をとつた場合、良識的かつ誠実にその人ができることをしたのなら、たとえ失敗してもその結果につき責任を問われない」

(ウィキペディア) という法律で、アメリカやカナダで施行されているとのことでした。

東北学院大学は、建学の精神として、キリスト教を土台にしています。日本では「善きサマリヤ人の法」を実現することは困難です。しかし、私は皆さんに強く望むことは、東北学院のキャンパスに学ぶ一人一人の皆さんが、神様によっていつも守られ、謙虚な気持ちでいつも持ち、その心の中には、「善きサマリヤ人の法」があり、学生生活を、そしてそれに続く社会生活をこの法のもとに皆さんが勇気を持って行動して貰いたいということです。そして皆さんの一人でも多くの方が「善きサマリヤ人」となることを願っています。

# 「東北学院崩壊の危機」

学院長（大学長） 星 宮 望

コリント人への手紙一、第一〇章十三節

13 あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずです。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。

東北学院は、二〇一一年の五月に創立百二五年を迎えました。多くの先輩たちのご努力に感謝したいと思います。その中でも、特別の事態、すなわち「東北学院崩壊の危機」を回避したいきさつについて学ぶ必要があると思います。

このことについては、二〇〇八年三月二二日に開催された東北学院同窓会東京支部一〇〇周年記念祝賀会で、東京支部長の紺野稔氏（東京弁護士会所属）が式典における実行委員長の挨拶として述べられたことであり、そして、これに関連した事情を、「東北学院資料室」という本学の冊子の Vol.7 (2007.12) に工学部教授の鶴本勝夫先生が詳細に記述しております。これらに加え

て、「東北学院一〇〇年史」をも参考にしてこれらの事情の要点をまとめてみたいと思います。もし「東北学院資料室」という本学の冊子についてよく知っていないという学生諸君がいましたら、是非、土樋のラーハウザー記念礼拝堂の地下にある東北学院資料室を訪れて展示品をご覧いただきたいと思います。そして、そこで、この「東北学院資料室」という本学の冊子を手に入れているだけだいたいと思います。

時は、太平洋戦争の末期の昭和一八年（一九四三年）です。

第二次世界大戦において日本の敗戦の兆しが濃厚になった昭和一八年一〇月一八日に、東北軍管区司令官東海林俊成少将から東北学院に対して、「東北学院は時局柄、不要不急の教育機関であるから、今年（昭和一八年）限り廃校とし、校舎は軍において接収する」との命令が出されました。この当時の軍の命令は絶対的であり、回避は不可能と思われました。いいかえれば、東北学院は廃校になることが決定的でした。

そのときに立ち上がり、この危機を救ったのが、東北学院卒業生であった萱場資郎氏でした。彼は、仙台市の出身で、明治四五年（一九一二年）四月、東北学院中学部に入学し、第二代院長のシュネーダー先生の薫陶を受けた卒業生で、当時、軍に対しても発言力があるほどの“ハイテック軍需企業”である「萱場製作所」の経営者でした。

この軍からの回避不可能と思える命令にどのように対応するかは極めて困難でした。そこで、すぐに、当時の東北学院の出村悌三郎院長が、急遽、萱場資郎氏に相談することにしました。萱場資郎氏は、当時、陸海軍の機密兵器の特許を多数保有しており、萱場製作所は新兵器の製造も盛んに実施しており、軍にとっても重要な人物で、軍に対する発言力があつたからでした。

この未曾有の危機に対して、同窓生としての萱場資郎氏の献身的な努力が始まりました。

萱場氏は出村院長と相談し、この軍の暴挙ともいふべき命令を撤回させる方策を考えました。最終的には、東北学院を、当時必要であつた「航空技術学校」に転進させることにしました。具体的な萱場氏の提案は、「陸軍航空本部、海軍技術部は、東北学院航空工業専門学校の設立を支持する。萱場製作所仙台工場は学生の実習工場とする。よつて、東北学院の廃校、校舎の接收は取りやめてもらいたい」というものでした。これを当時の東海林東北軍管区司令官に対して強力に要請した結果、最終的には、「廃校と校舎の接收命令」は撤回され、東北学院は非常事態をようやく免れることが出来ました。

具体的な「東北学院航空工業専門学校」開設にあつては、当時の東北帝国大学工学部長の宮城音五郎教授が、東北学院航空工業専門学校長を兼務することも決定し、萱場製作所からの全面的な援助を前提とした計画が策定され、具体的な専門学校の発足が推進されました。昭和十九年

三月二三―二五日に入学試験を行い、昭和一九年四月に開学することが決定されました。開学の目的は、「本学は専門学校令の定むるところに依り、航空工業に従事すべき者に高等の学術技芸を授け、国家有用の人物を練成するをもって目的とす」とされておりました。入学定員は、航空機科一〇〇名、発動機科五十名、修業年限三年とされていきました。

このような涙ぐましい努力が功を奏し、最終的には、隈部少将による軍管区司令官への進言もあつて、「東北学院の廃校」は撤回されることになりました。

その後、皆さんご存知のように、日本はポツダム宣言を受諾して昭和二〇年八月一五日に、「無条件降伏」をしました。したがつて、国策にしたがつて開設された「東北学院航空工業専門学校」も用を成さなくなり、同年九月一八日には「東北学院工業専門学校」と名称を変更し、大幅な学科改組を行ないました。定員は、機械科七〇名、建築科七〇名、工業経営科六〇名となったようです。

そして、昭和二二年三月、東北学院工業専門学校も廃止され、同年四月に新たに文経の専門学校が設置されることになり、これが昭和二四年に発足した新制東北学院大学の始まりにつながります。

これらの一連の激動の事件、言い換えれば、「究極の試練」を経た後に、萱場氏は次のように述

べたと伝えられています。

「東北学院航空工業専門学校は二年、工業専門学校は一年と短命であったが、これは東北学院大  
学工学部創設の礎石となった。」

このような経緯と歴史をふまえて設立された東北学院大学工学部は、極めて重要な役割を担っていることを認識しなければなりません。このことは、東北学院大学工学部に所属する教員・職員はもとより、その他の学部にも所属する教員・職員にとつても共有するべき重要なことです。工学部が多賀城キャンパスにあることで、地理的に不利な条件を抱えているかもしれませんが、最近になって、セントラル自動車、東京エレクトロン社などが宮城県に本拠地を設定しました。今こそ、東北学院大学としては、建学の精神であるキリストの教えを理解した高レベルの技術者が力を発揮するチャンスが巡ってきました。その他に、これらの企業では技術者ばかりでなく、経済学、法学、文学、その他の広い分野で学んだ多くの高レベルの大学卒業生の採用も予定されています。まさに、東北学院大学の卒業生が活躍する場が備えられたと認識し、それにきちっと対応していただきたいと願っています。

なお、萱場資郎氏は戦時中の極めて困難な時期に、母校東北学院のために心身を賭して支える努力をされました。このことは、その後、昭和四六年五月一日の東北学院八五周年記念の一五

日会での講演会の席上で始めてご本人から同窓生に対して語られたということです。

まさに、ここで拝読しましたコリント人への手紙一に記述されておりますように、「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかつたはずで、神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。」という御言葉が実態的に受け止められるように思います。

菅場資郎さんは、まさに「地の塩」の役割を果たされた先輩であります。我々もその後を辿りたいものと思います。

# 「豊かな他者感覚」

仙台松陵教会 協力牧師 深田寛

マルコによる福音書、八章一節～十節

1 そのころ、まだ群衆が大勢いて、何も食べる物がなかったので、イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた。2 「群衆がかわいそうだ。もう三日もわたしと一緒にいるのに、食べ物がない。3 空腹のまま家に帰らせると、途中で疲れきってしまおう。中には遠くから来ている者もいる。」4 弟子たちは答えた。「こんな人里離れた所で、いったいどこからパンを手に入れて、これだけの人に十分食べさせることができるでしょうか。」5 イエスが「パンは幾つあるか」とお尋ねになると、弟子たちは、「七つあります」と言った。6 そこで、イエスは地面に座るように群衆に命じ、七つのパンを取り、感謝の祈りを唱えてこれを裂き、人々に配るようにと弟子たちにお渡しになった。弟子たちは群衆に配った。7 また、小さい魚が少しあったので、賛美の祈りを唱えて、それも配るようにと言われた。8 人々は食べて満腹したが、残ったパンの屑を集めると、七籠になった。9 およそ四千人の人がいた。イエスは彼らを解散させられた。10 それからすぐに、弟子たちと共に舟に乗って、

## ダルマヌタの地方ちほうに行かれた。

誰にでも心に残る、忘れられない光景が幾つかあると思います。ほほえましい光景もあれば、目を覆いたくなる悲惨な光景もあるでしょう。また人生を大きく変えてしまうような感動的な光景もあると思います。

私にも幾つかの忘れられない光景があります。今から七十年ほど前、私は小学校低学年でしたが、手首を骨折してしまい近所の小さな医院に駆けつけました。当時の病院は現在のような施設も完備されていませんし、医療技術も進歩していませんでした。

おそろおそろの病院の待合室に入ると、診察室から悲鳴とも思える、子供の泣き叫ぶ声が響き渡っていました。泣き声から推測するに、幼い子供が怪我の治療をされていると思われました。

その時に忘れられない光景を見ました。その子の母親と思える人が、助けを求める子供の泣き声に、いたたまれなかったのでしょうか、診察室の入り口の傍らに置かれていた木製のベンチに、両耳を手で覆い、頭を左右に振りながらうつ伏して、必死にわが子の泣き声を耐えている姿でした。

母親にとってわが子の痛みや不安が自分のもののように感じられたのでしょうか。母親にとってわ

が子の悲痛な叫びは自分の叫びであつたにちがいありません。

この母親の心にはわが子に限りなく接近している、豊かな心があるように思います。このような心を「他者感覚」と表現出来るように思います。人間にはこのような心が与えられているように思います。

冒頭に記しましたマルコ福音書の中に、イエスの豊かな「他者感覚」を読みとることが出来ます。イエスの話を聞くために各地から人々が集まっていました。人々は三日もイエスと行動を共にしていた結果、彼らが持っていた食料も底を潰してしまいました。人々は空腹を抱えはじめたのです。イエスはこのような状況にいる人々を見られ「群衆がかawaiiそうだ」と語りはじめられました。ここに使われている「かawaiiそう」と言う字は同情する意味より、更に深い「腸がちぎれる」という意味が込められている言葉です。群衆に対するイエスの深い思いが示されています。

その思いはさらに「空腹のまま家に帰らせると、途中で疲れきってしまうだろう。中には遠くから来ている者もいる。」と語られます。イエスは人々を「群衆」と言う言葉でひとからげにせず、一人一人人に思いを傾注されています。一人の死は悲しみとなるが多くの人の死は統計となる、と言われますがイエスは一人一人に配慮されています。

このようなイエスの言葉に対して弟子達は「こんな人里離れた所で、これだけの人に十分食べ

させることが出来るでしょうか」と語ります。確かに弟子の語るように現実には厳しく困難な状況かも知れません。しかしイエスの豊かな他者を思う感覚は奇跡を生みました。

イエスは手もとにある七つのパンと数少の魚で四千人に給食を提供され、人々は十分に食べ、残ったパンは七籠もあつたと記されています。

この数については誇張や象徴的な意味がありますが、この奇跡の記述は豊かな他者感覚を持たれている、イエスを中心にした集まりが、いかに豊かであつたかを指示しています。

昔の教育は「寺子屋」と称される場所で行われていました。そこで学ぶことは「読み」「書き」「算盤」でした。この科目は日常生活にとつて欠くことの出来ないものです。

なぜ「読み」「書き」「算盤」という順序なのでしょう。語呂がよいからかも知れません。しかし現代社会に生きる者にとつて、その順序に深い意味を感じます。

「読み」は相手の意見を聴くことです。「書き」は自分の意見を表明することです。「算盤」は数量を数え損得を確認することでしょう。この順序が守られるならば「他者感覚」も豊かになるように思います。

現在の社会傾向は「読み」「書き」「算盤」が逆になっている傾向があります。先ず損得という「算盤」、次に他者より自分を優先する「書き」がきて、最後に他者のことも聞こうという「読み」に

なっているように思います。

このような傾向が続くと「他者感覚」は希薄になり、自己中心による争いが起こり、自らの手で自らを破滅に落としいけてしまう結果になります。

イエスの言動は「豊かな他者感覚」に根ざしたものでありました。そのことを「愛の行動」と言い換える事が出来ます。その行動の頂点が人間の罪責の責任を担って十字架に付かれた贖罪行為なのです。

# 無条件・無制限の愛に育まれて

東北学院中学校・高等学校 宗教主任

松井浩樹

コリントの信徒への手紙二、第三章一節―二三節

- 1 たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしい  
どら、やかましいシンバル。2 たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知  
識に通じていようと、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持つていようと、愛が  
なければ、無に等しい。3 全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとして  
わが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。
- 4 愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。5 礼を失せず、  
自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。6 不義を喜ばず、真実を喜ぶ。7 すべ  
てを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。
- 8 愛は決して滅びない。預言は廃れ、異言はやみ、知識は廃れよう、9 わたしたちの知識  
は一部分、預言も一部分だから。10 完全なものが来たときには、部分的なものは廃れよう。
- 11 幼子だったとき、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えて

いた。成人せいじんした今いま、幼子おさないこのことを棄すてた。<sup>12</sup> わたしたちは、今いまは、鏡かがみにおぼろに映うつつたものを見みている。だがそのときには、顔かほと顔かほとを合あわせて見みることになる。わたしは、今いまは一部いちぶしか知らなくとも、そのときには、はつきり知られているようにはつきり知しることになる。<sup>13</sup> それゆえ、信仰しんこうと、希望きぼうと、愛あい、この三つは、いつまでも残のこる。その中なかで最もも大おほいなるものは、愛あいである。

新学期が始まって、しばらくが経ちました。新しい環境に随分となれてきたかと思えます。そこで、今日は初めに、この「礼拝」について考えてみたいと思います。

まず、皆さんから見てむかつて右にあるボードに従って、礼拝が進められています。ただ、この順序にも意味があるということをまず、今日はお話をします。

皆さんが、ここに来ると奏楽者がオルガンを弾いている、ないし弾き始めます。ボードには記されていないのですが、実はこの「前奏」といいますが、ここから礼拝は始まっているのです。いかがでしょうか。きちんと聞いているでしょうか。中には、楽しそうな話に盛り上がりを見せている人も見受けられますが、そういうことのためのバックミュージックではないのです。神からの呼びかけであります。しかも、正式な礼拝の前奏曲をプロの奏楽者が弾くのです。礼拝です

から、とにかくオルガンを聞いていただきたい。そしてオルガンが鳴り終わると、今度は讃美歌を歌います。つまり、その神の語りかけのオルガンを聞きます。今度は、それに応えて私たちの側が、神に対してほめたたえの歌を歌う。だから起立して、全員で歌うのです。

次に聖書朗読と話が続きます。これはみなさん静かに聞いていると思います。その聞いた次は、お祈りと頌栄讃美歌を歌います。これはその聖書朗読と話を聞いて応えるという、先ほどと同じ行為となります。

礼拝が終わると、またオルガンの後奏が鳴り、退場します。これも礼拝によって励ましを受けてのことですから静かに聞きつつ退場をします。

つまり、この礼拝は目には見えませんが「神」が私たちに語る、それに対して、私たちが聞いて応えていく、という「対話形式」になっているということなのです。ですから、とにかくオルガンを聞いて、心を落ち着けてから礼拝に臨んでいただきたい、そうでなければせっかくの礼拝が成り立たないということになりかねないのです。短い時間ですから、きちんと礼拝をさげていきたいと思うのです。

さて、今読みました聖書の言葉は、「愛の賛歌」といわれる聖書の中でも大変に有名な言葉であります。特に四節以下の言葉は、キリスト教式の結婚式で読まれ、聖書を知らない人でも耳にし

た記憶があるところであります。しかしながら、私たちが「愛の賛歌」と聞きますと何を思うでしょうか。テレビのドラマならともかく、私たちが日常で「愛する」とは、なかなか現実味がない漠然とした言葉ではないでしょうか。

しかし、実は私たち人間は、時々強烈な愛を發揮することがあります。例えば、親しい友人に対する愛です。友人のために時間を割き、相談にのり、援助を惜しまない自己犠牲の行動をとります。また、保護者が子供のために、これも大変な犠牲を払って長い期間、子供を育てていく、これも大きな愛の一つです。そしてもう一つは、私たちが想像しやすい男女の愛です。これも、はたから見ると、自己犠牲を伴う尋常ではない愛を發揮し、時には大きなトラブルさえも起こりかねないほどの愛であります。

では、今朝聖書で言われる「愛」とは何かということですが、そこでまず初めに、なぜ「愛」が語られるのかに注目したいと思います。その答えは一つしかありません。それは、私たち人間は、基本的に「愛」を持ち合わせていないからこそ、聖書で「愛」が語られるのです。先ほど紹介した「愛」の形は、あくまで例外として、条件付きの愛でしかありません。友人に対する愛も、自分の親しい間柄のみに限定されます。保護者が子供のために、というのも自分の子供のためという制限があります。男女の愛も、自分が好きになった人ということしか發揮されません。つまり私たち

がもちあわせるところの愛は、自分中心の「愛」にかたよりがちということです。その一方で、私たち人間が持ち合わせる「愛」とまったく違った「愛」を示すのが、聖書の主人公、神であります。

その神の示す「愛」とは、主イエス・キリストを十字架につけてまでも「あなた」を愛してくださるという、一言に尽きます。つまり、私たちが条件付きの愛でしかないのに対して、神の愛は無条件・無制限に私たち一人一人に注がれるというものであるのです。それゆえに七節の言葉につながるのです。「神は私たちのすべてを忍ぶ」、つまり守っておられるということです。そしてすべてを信じるですから、私たちを全面的に信じ抜いておられるということ、「すべてを望み」、つまり私たちの将来のすべてに期待しておられるということ。最後、「すべてに耐える」とは、私たちのすべてを大切にしてください、と理解することができます。そういう愛があるということ、その愛が私たち一人一人に注がれているということを信じる、ないし受け入れるかどうかということが今日の聖書の言葉から読み取れるのであります。

六月を迎えました。これまで新しい環境で、慣れないことが連続していたことと思えます。今が一番気候の良い季節であります。環境にも慣れ、いろいろなことに積極的に取り組んでいくには、よい時期であります。そして今日の聖書にあるように、私たち一人一人に、無条件・無制限に神

の愛が注がれていることを心にとめていただきたい。その神の愛を励みに、一つ一つの事柄に恐れることなく、誠実に向きあう大学生活を送っていただきたいと願うのであります。

主なる神、礼拝を感謝いたします。神の言葉を聞き、祈りをもって、あなたの御心に答えていくことができますように、どうかここに集う一人ひとりを豊かに祝福し、その歩みを導いて下さい。主の御名によって祈ります。アーメン

## 「神の言葉を聴く心」

東北学院榴ヶ岡高等学校 宗教主任

西間木

順

皆さんは、ミレーの「種まく人」という絵を見たことがあるでしょうか。ミレーはクリスチャンでありましたので、聖書や信仰生活を題材にした絵を書いています。「種まく人」は、主イエスの「種まく人のたとえ」を題材にしたと言われています。主イエスの「種まく人のたとえ」は、今日共に読みました箇所の前に書かれてあります。

今日の箇所は、主イエスが、「種まく人のたとえ」を語り終えた後、主イエスと弟子との問答であります。弟子たちが、主イエスに質問いたします。「なぜ、あの人たちにはたとえを用いてお話しになるのですか。」弟子たちは疑問に思ったに違いありません。なぜ自分たちには、たとえを用いて教えてくださらないのか。ですから、主イエスに直接聞いたのであります。

弟子たちの言う「あの人たち」とは誰のことでしょうか。それは、主イエスの教えを聴きに来た人たちであります。聞きに来たからといって、一生懸命話を聴くというわけではないことは、私たちは経験していることでもあります。

高校で授業をしていますと、生徒の授業に臨む態度がわかります。ただ聞いているだけ、あるいは

は聞いている振りをして、別のことを考えている生徒もいます。あるいは、教室にいただけで、授業とは関係のないことをやっている生徒もいます。それに対して、知りたい、学びたいと、授業から新しい知識を得ようとしている生徒もいます。どのような態度で授業に臨むかは、実は、自分の決断によるのであります。

確かに主イエスの教えを聞こうと、たくさんの人が集まってきましたが、主イエスはその人たちのことを、「見ても、見ず、聞いても聞かず、理解できない」と言っています。それはなぜでしょうか。それは、主イエスが語る神様の言葉を聞くだけで終わる人たちだったからであります。イエスという有名な人の話をきくことができるから行ってみようか、何か面白い話をしてくれるに違いないから行ってみようか、あるいは、周りの人が行くから自分も行こうか、という程度で集まって来た人たちだったと考えることができます。言い換えれば、主イエスの教えを心から理解しようとしなかった人たちが、と言えます。心をかたくなにし、自分の今までの歩みを振り返ろうとしない、自分の心と向き合おうとしない。主イエスの言葉を聞いても、いろいろ屁理屈をならべ、受け入れようとはしない。素直に聞いているけど、心の中では拒絶する。そんな人たちであります。

そのような心をかたくなにしている人たちに対し、主イエスは、弟子たちには、「あなたがたの目は見ているから幸いだ。あなたがたの耳は聞いているから幸いだ」と言っています。弟子たちと主

イエスの話を聞きに集まって来ている人との違いは何でありましょうか。

弟子たちは、主イエスに従った人たちであります。弟子のリーダー格であったペトロは、もともとは漁師でありました。主イエスの「わたしについて来なさい」という言葉を聞き、自分の職を捨て、主イエスに従ったのであります。他の弟子達も同様であります。弟子達は、今までの自分の生き方を変えよう、主イエスに従おう、という決断をしたのであります。

主イエスの教えを聞いただけでは、神の国の秘密が、実はわからないのであります。「主イエスに従う」という決断をしなければ、決してわからないのであります。

弟子達は、神様の秘密を理解することができるようになる。主イエスに従うという決断をし、主イエスに従ったからであります。そのような決断をした弟子たちに対して、主イエスが、わかるようにしてくださるのであります。主イエスが、神様の秘密を教えてくださいます。言葉だけで教えてくださるのではない。主イエスは身をもって教えてくださいます。主イエスは、病気の人のそばへ直接行かれました。社会から隔離された人のところへ入って行かれました。弟子たちは、常に主イエスのそばにいて、そのような行動を直接見ていたのであります。その主イエスの行動を見、お語りなる言葉を聞くことによって、弟子たちは、神の国の秘密が理解できるようになるのであります。

私達にも、弟子達と同じような決断が求められているのではないかと思います。群集のように、ただ見ている、ただ聞いているだけに終わってはいないでしょうか。「自分はクリスチャンではないから、聞かなくてもいい」、「聖書には、いいことが書いてある、でも自分には関係がない」と思っ  
てはいないでしょうか。

私たちは、礼拝で神の言葉を聞いています。また、キリスト教学という授業を通して、キリスト教について学んでいます。その中心となるのが、「神の愛」であると言えます。先ほど言いましたように、主イエスは、身を持って、私たちに「神の愛」を教えてくださいださっているのです。私たちは、「神の愛」を知っている。主イエスを通して示された「神の愛」を知っているのだから、その「愛」に応えることが求められる。決断することが求められています。すなわち、主イエスに従う歩みをするのが求められているのであります。

東北学院の第二代院長であったシュネーダー先生は、宣教師を日本へ派遣する働きをしていた、アメリカのミッションボードに対して、次のように手紙を書いています。They are christian in their thinking and living. They とは、東北学院の卒業生のことです。christian は小文字で始まっています。東北学院の卒業生は大部分は思想的にも生き方や考え方において、キリスト教的である。すなわちキリスト教的人生観なのである、ということを書いていのではないかと思います。これこそ、

この学校で、学ぶ私たちの決断ではないかと思ひます。

しかしどんなに「決断」をしても、順風満帆な歩みをするわけではないのであります。私たちは、迷うこともある、絶望することもある。あるいは、疑うこともある。信じてても信じきれないというような思いになることもある。それは、茨の中に蒔かれた種、石の上に蒔かれた種のようなものであります。そのような時においても、主イエスは、神の言葉という種を、私たちの心に蒔き続けてくださっている。実りの多いよい土地になるように、神の言葉によって耕してくださっている。それによって私たちの心は、よい土地となることができ、実をたくさん結ぶことができるようになるのであります。

決断には信頼が伴います。すべてを主に委ねて従っていく。そして、「主よ、お話しください。僕は聞いております」という心で、主イエスのお語りになる神の言葉を聞きたいのであります。

# 「主を待ち望む」

宗 教 部 長 佐 々 木 哲 夫

## 詩編一三〇編一〜八節

<sup>1</sup>都に上る歌。

深い淵の底から、主よ、あなたを呼びます。

2 主よ、この声を聞き取ってください。

嘆き祈るわたしの声に耳を傾けてください。

3 主よ、あなたが罪をすべて心に留められるなら

主よ、誰が耐ええましょう。

4 しかし、赦しはあなたのもとにあり

人はあなたを恐れ敬うのです。

5 わたしは主に望みをおき

わたしの魂は望みをおき

御言葉を待ち望みます。

6 わたしの魂は主を待ち望みます

見張りが朝を待つにもまして

見張りが朝を待つにもまして。

7 イスラエルよ、主を待ち望め。

慈しみは主のもとに

豊かな贖いも主のもとに。

8 主は、イスラエルを

すべての罪から贖ってください。

ヨハネによる福音書、第一章一四〜一八節

14 言は肉となつて、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であつて、恵みと真理とに満ちていた。15 ヨハネは、この方につ

いて証しをし、声を張り上げて言った。「わたしの後から来られる方は、わたしより優れている。わたしよりも先におられたからである」とわたしが言ったのは、この方のことである。」<sup>16</sup> わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。<sup>17</sup> 律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。<sup>18</sup> いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。

最初のクリスマスから既に二千年ほどの年が過ぎました。今日の私たちは、昔の時代と違って自由に聖書を読むことができます。特に、福音書を読むことでイエス・キリストの誕生を知ることができます。たとえば、羊飼いたちに現れた天の大軍、占星術の学者たちの宝物、家畜小屋に寝かされた赤子、しかも、この赤子が最後に十字架につくことまで十分に承知しています。まるで、未来を見る預言者のように知ることができます。

しかし、イエス・キリスト誕生以前の人々、旧約聖書の時代の人々は、そうではありませんでした。彼らはメシアの到来を信じていたのですが、それが何時なのか、また、そのとき何が起きるのかについて知りませんでした。もっぱら関心を寄せていたことは、羊飼いや占星術の学者のことで

はなくメシア誕生の本質でした。換言するならば、クリスマスの本質的意義を一生懸命に見ていたのです。そのような旧約聖書の人物の中に本日開きました聖書の箇所、詩編一三〇編の詩人もいました。詩編一三〇編を中心に、イエス・キリスト誕生の意義についてご一緒に考えたいと思います。

\*

さて、詩編一三〇編一節〜六節の部分に注目したいと思います。この部分の内容を六つに分け、それぞれに鍵となる言葉に注目しながら、階段に譬えて読んでいきたいと思えます。すなわち、最初に三つの階段を下がるように読み、それから三段上がるように読むという組み立てです。

まず一段目です。この段の鍵となる言葉は一節の「深い淵の底」です。「深い淵の底」という表現は、「海の底」や「沼の底」の意味で使われる表現で、恐らく光も届かない深い場所だと推測されます。心の奥底を暗示しているようです。真つ暗な心の底から「主よ」と叫んでいる詩人の姿が連想されます。

さらに一段下がると第二段目の鍵となる言葉が現れてきます。二節の「嘆き祈るわたしの声」です。「嘆き祈る」は、ただ祈るのではなく、なりふり構わず懇願する祈り、嘆願の叫びです。詩人は、「私の声を聞いてくれ」「あなたの耳をそばだててくれ」と叫んでいます。なぜそれほどに、

詩人は切羽詰まって叫び祈っているのでしょうか。

さらに下がり三段目になると、詩人の嘆く理由がはっきりとします。鍵の言葉は罪です。「主よ、あなたが罪をすべて心に留められるなら、主よ、誰が耐ええましょう」（二節）と詩人は嘆きます。自らの罪を問題にしていたのです。ここでの罪とは、ねじ曲がった行い、裁きが必要なほどの墮落のことです。詩人は、誰も見ることでできない心の奥底にある自分の罪を見つめていたのです。そして、深い淵の底から叫ぶ者となったのです。しかし、真つ暗な闇は、真つ暗なままで広がっていませんでした。目の前にうつすらと上りの階段が浮かび上がってきたのです。詩人は、ためらわずその階段を上ります。

さて、上り階段の一段目の鍵は、赦しです。「赦しはあなたのもとにあり」（四節）と断言しています。紀元五世紀の頃ですが、自分の罪を自分の能力や努力によって消し去ることができると考えた神学者がいました。健康で能力抜群、品行方正で意志が強く、寸分の隙もない指導者だったと想像されます。彼は、功徳を積むことによって罪の赦しに参与できると考えたのです。しかし、詩編一三〇編の詩人は「罪の赦しは、主にある」と断言しています。

もう一段上ると、深い淵の暗闇の中に異なる景色が見えてきます。五節と六節の言葉、望み、そして希望です。主に望みを置き、主の言葉を待ち望むというのです。詩人は、叫び求めること

をやめ、罪を赦す主の到来を待ち望み始めます。

さらに一段のぼり三段目までくると、そこはもはや絶望の暗闇ではなく、詩人は見張り番の気持ちになります。すなわち、朝日の光が差し込むのを待つ見張り番の気持ちです。光の到来、罪の赦しの到来、それが詩人が見つめたクリスマスの本質的意義でした。

\*  
\*

旧約聖書の人々にとって、罪をどのように贖うかは、実存的な重要問題でした。命をもって罪を贖うべきことは承知していたのですが、自分の命をもってするならば自分の存在が消えてしまいます。そこで、彼らは、牛や羊などの動物の命で贖いの儀式をおこないました。しかし、身代わりの動物では不完全です。また、そこから得られる赦しもまた不完全です。それゆえ、彼らは、繰り返し贖いの犠牲を捧げたのでした。他方、彼らは完全な赦しの実現を望みました。すなわち、罪を完全に贖うことのできるメシアの到来を待ち望んだのです。まるで、朝の光を待ち望む見張りのように待ち望んだのです。

ところで、新約聖書時代の使徒たち、既に最初のクリスマスを体験した者たちは、罪の贖いについて、詳細な言及を残してあります。例えば、使徒パウロは次のように記しました。

律法を実行することによっては、だれ一人神の前で義とされない。

律法によっては、罪の自覚しか生じない。

(ローマの信徒への手紙、第三章二〇節)

ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、

神の恵みにより無償で義とされるのです。

(ローマの信徒への手紙、第三章二四節)

また、使徒ペテロも記しています。

キリストは、…十字架にかかって、

自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。

わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです。

(ペトロの手紙第一、第二章二四節)

彼らのはっきりと自覚していたことは、イエス・キリストの誕生が、罪を完全に贖うことので

きるメシアの到来だったということです。それをヨハネ福音書は、「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。…恵みと真理とに満ちていた」と表現し、また、「光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らす」「光は暗闇の中で輝いている」と表現したのです。イエス・キリストの誕生を、暗闇の中に差し込んだ一条の光に譬えたのです。まさにそれは、見張りが目撃した朝日と重なり合う表現です。

今日、私たちは、イエス・キリスト誕生から二千年ほど後の時代に生きています。イエス・キリストの十字架だけでなく、その後の教会二千年の盛衰など多くのことを知る者となっています。しかし、イエス・キリストの誕生を祝う者の見つめるところは昔も今も変わらずただ一点です。それは、恵みと真理とに満ちたまことの光の到来、罪を消し去る救い主イエス・キリストの到来という一点です。今年のクリスマスに、私たちがもまたその一点に集中しつつお祝いしたいと思います。

## 「逆転した立ち位置」

大学宗教授任 永井義之

ルカによる福音書、第十九章一節～一〇節

1 イエスはエリコに入り、町を通っておられた。2 そこにザアカイという人がいた。この人は徴税人の頭で、金持ちであった。3 イエスがどんな人か見ようとしたが、背が低かった。群衆に遮られて見ることができなかった。4 それで、イエスを見るために、走って先回りし、いちじく桑の木に登った。そこを通り過ぎようとしておられたからである。5 イエスはその場所に来ると、上を見上げて言われた。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」6 ザアカイは急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた。7 これを見た人たちは皆つぶやいた。「あの人は罪深い男のところに行つて宿をとつた。」8 しかし、ザアカイは立ち上がって、主に言った。「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取つていたら、それを四倍にして返します。」9 イエスは言われた。「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。10 人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。」

エリコの町を通り抜けようとしていた主イエスに徴税人ザアカイが出会って回心したという記事です。この記事で注目すべき言葉はイエスがザアカイを「見上げた（五節）」という言葉です。これは道を通り過ぎようとするイエスを群衆に遮られて見ることのできなかつた背の低いザアカイが先回りをして、道路に覆いかぶさる木に登りそこからイエスを見ようとした、そのとき、イエスが下から木に登って見おろしているザアカイに語りかけたという状況です。イエスは道路を歩いており、ザアカイは木に登っているのですから、当然イエスは上を見上げてザアカイに語りかけたということになります。ところで「見上げる」という言葉は原文では「アナブレポー」という動詞が用いられていますが、この言葉は「見上げる」という意味のほかに「再び見える（視力回復）」の意味があります。ザアカイの記事の直前に書かれていたのはひとりの盲人の話です（二八章三五〜四三節）。そこでは道端に座して通り過ぎる人々に物乞いをして生計を立てていた盲人が描かれています。彼は今イエスが道を通って行かれることを聞きつけ、大声を張り上げて憐れみを乞うたところ、イエスが立ち止まって「何をしてほしいのか」と尋ねられた、その時、盲人は「主よ、見えるようになりたいのです」と答えたとありますが、ここでの「見えるようになる」という言葉は先程の「アナブレポー」です。つまりこの盲人にとって自分とイエスの位置

関係は、盲人が道端に座って前に立っているイエスを見上げるといふ構図です。目の見えない盲人が自分の前に立っているイエスを見上げるとはとりもなおさず彼の視力が回復され再び見えるようになることを意味したはずで、この「アナブレポー」は読む人に二重の意味、かけ言葉のように作用するのではないかと思えます。目が見えるようになりたい、それは主イエスを見上げることに通じているはずで、

さて、ザアカイの話に戻りましょう。ザアカイはイエスを見ようとして道路上の木に登り、そこから「見おろそう」としていました。まさしくこの行動はザアカイの人生を象徴するものであつたかもしれません。徴税人として同胞からは軽蔑され、背の低い小男のせいで嫌がらせにも会つてきた彼には、同胞を見返す手段としては税金の違法な過剰とりたてにより私腹を肥やし、財力にものを言わせる形で人々を「見おろす」ことが彼に残された生き方でありました。「見おろす」「見ください」人生を送つてきたザアカイに突然、下からザアカイを見上げる形で言葉をかけてきたのは主イエスでありました。これはザアカイには思いもよらないことでした。いつもの通りに自分より「下に」世の中を見てきたので、この日も自分の下をイエスとかいう有名な人が通つて行くのをただ眺めただけでした。しかし今や、見上げているのはイエスの方で、自分は見おろす位置にすることにザアカイは気付いたに違いありません。エリコの盲人の位置、構図とは全く逆です。

見くだしていた自分が今や見上げられている。彼は居心地の悪さから急いで木から下りてイエスを自分の家に招き入れました。そして回心をし今までの生活を一新するのです。

ザアカイが樹上で感じたであろう居心地の悪さとは何であつたでしょうか。イエスに声をかけられるまでの彼は、何の違和感もなく人々を、そして世の中を見くだしていたに違いありません。ところが木の上で、イエスに見上げられて声をかけられる自分を客観視したとき初めて、自分のいる場が違ふと感じたのではないでしょうか。自分がイエスを見おろし、イエスがザアカイを見上げるのは逆だ、ということですから。本来見上げられるべき方であるイエスが低い位置に立つておられる。本当は自分こそが低い位置にいるべきでありそこからイエスを見上げるのが筋ではないか。ザアカイが感じたであろう違和感の実態は、人間としてあるべき位置にいない自分をまざまざと知らされたことにあります。恥ずかしげもなくイエスを見たいと木に登り、眺めを一人占めしようとする行為は自分本位の行動であつたでしょう。でもそれを何とも思わず実行に移し人がどう思おうが意に介しない。イエスから声をかけられるまではまさしくそのようであつたザアカイでありました。ところがイエスの声掛けを受けて初めて、自分の立ち位置を彼は知るに至つたのです。

主イエスが立つておられる低い場所、それは聖書の語り伝えるところによれば十字架の死とい

う低い場所であります。ザアカイに声をかけられたように主イエスは十字架の死という低い所から私たちを見上げて、声をかけて下さる。その御声は私たちが本来いるべき位置を教えてくださいます。私たちが勘違いをし間違った立ち位置にあつたとしても、それを修正できるよう導いてくれます。低い位置に下られた主イエスは同時にまた死に打ち勝ち復活された主イエスであります。その復活の主イエスを見上げる私たちを共に立ち上げらせ復活の命にわたしたちを生かして下さいます。

祈りましょう。

憐れみ深い神、キリスト・イエスによって共に復活にあずかせてくださり、私たちを生かしてください。救いの恵みを感じたいします。どうか、私たちの日々の歩みを守ってください。あなたの御声を聞こうとしないとき、私たちは自分の真実の姿を見ることができず、的を外れな生き方をしているもそれと気づかない私たちです。どうかあなたの御声を聞き、それに従う歩みができますよう導いてください。主イエス・キリストの御名によってお願いします。アーメン

(二〇一一年九月二〇日、泉キャンパス礼拝説教)

# 「砂漠で祈るキリスト」

大学宗教学主任 野村 信

## マルコによる福音書、第一章三五～三九節

<sup>35</sup>朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れた所へ出て行き、そこで祈っておられた。<sup>36</sup>シモンとその仲間がイエスの後を追い、<sup>37</sup>見つけると、「みんなが捜しています」と言った。<sup>38</sup>イエスは言われた。「近くのほかの町や村へ行こう。そこでも、わたしは宣教する。そのためにわたしは出て来たのである。」<sup>39</sup>そして、ガリラヤ中の会堂に行き、宣教し、悪霊を追い出された。

主イエスは、暗闇の中、砂漠で祈っておられた、と今、読みました聖書に記されています。安息日に教え、癒し、その夜にも大勢の人々の病や苦しみを治した後に、翌日、まだ暗い時間に、人里離れた所で祈っておられた、とありますが、人里離れた所とは、荒れ野、砂漠と訳される言葉です。

なぜそんな場所にわざわざ出かけたのでしょうか。人々のいるところでは、祈れないのでし

うか、騒がしかったのですか。あるいは、荒れ野は自分を鍛えるのにふさわしい場所だったのでしょうか。少々、気にかかるそうです。

しかし、他の聖書の箇所を見ると実は、驚くべきことがこの荒れ野、砂漠で起きています。それは、有名な五〇〇〇人の人々をパン五つと魚二匹で養うという奇跡がありますが、それは人里離れた淋しいところ起きた出来事でした。弟子たちが、夕方になって、心配になり、主イエスに「ここは人里離れた寂しいところですから、砂漠ですから、群集を解散させてください」と願ったのです。その荒れ野で多くの人々がキリストによって癒され、養われたのです。さらに荒れ野とは、主イエスが初期のころ四〇日間断食をした場所でもあります。

荒れ野、ないしは砂漠は、主イエス・キリストにとって、寂しい、孤独な場所ではなかったのです。もっと深い意味を持つ世界であり、この荒れ野において、主イエスは、父なる神に近づかれたと聖書は示します。

旧約聖書の中においても、砂漠は深い意味をもっていました。例えば、聖書における最初の信仰の人と言われるアブラハムが、当時繁栄した大都會であったバビロンのウルという町から、ハランという町に行った時、神はアブラハムにさらに旅をして、カナンの地へと下っていくように命じられました。恐らくアブラハムの目の前には、果てしなく広がる砂漠があり、それを通して、

見知らぬカナンの地へと移って行かなければならなかつたはずなのです。しかもあなたの子孫は、星の数のように、海辺の砂のように増やすと神から約束されたのですが、当時、アブラハムには子供すらいなかつたのです。とにかく砂漠を越えて、見知らぬカナンの地でアブラハムは過ごしました。

そのアブラハムの孫にあたるヤコブという人物ですが、この人は家の中で、もめごとを起こし、家から逃げ出してハラシムへ向って行きますが、その旅の途中、砂漠で石を枕にして寝ていると、夢の中に天と地をつなぐ階段が現れ、天使たちがそれを上ったり降りたりしている様子を見たのです。目が覚めてから、こんな砂漠に、誰もいないはずの寂しい所に、神の世界への入り口があつたと驚いて、その場所をベテル（天の門）と名付けたのです。

この後、だいたつてからイスラエルの人々は、エジプトからカナンの地へ向かう出エジプトという出来事を体験しますが、四〇年間、荒れ野、砂漠を旅しながら、神に様々に働きかけられ、導かれて、しつかり鍛えられて故郷カナンの地へ帰っていきました。

他にも砂漠で起こつた驚くべき出来事はいくつもあります。とにかく、主イエス・キリストにとり、そして神を信じる人々にとって、砂漠は決して寂しい、人気のない恐ろしい場所ではなかつたのです。いやむしろ砂漠のような世界にあつてこそ、全能なる神に出会うことが出来ると、

このことは私たちに告げてきます。

本日は、砂漠、荒れ野という言葉強調して、この言葉のもつ意味を考えたいのですが、実は、このことは、現代の私たちにとっても大切なことであると思います。それは、ここには神などない、何の良いものもない、と思えるような世界にあって、実は、神は豊かに働いて下さる、ということなのです。

昔、東京砂漠という言葉がはりました。大都会に多くの人がいるのに、誰も知らない、気付かない、拘かまつてくれない、という孤独な都会の生活を、いわば東京砂漠と呼んだのです。今も、実際あまり変わってはいないようです。別段、東京だけではありません。私たちの生活の中においても、孤独で、寂しい、あるいは、何も面白くなく、退屈な日々を過ごしていると思う時があるかもしれません。

しかし、聖書は私たちがそのような世界に置かれている時にこそ、まさに神は豊かに働き、祈りを聞いてくださることを示しています。

本日は、一二月一日でありまして、いよいよ今年も最後の月を迎え、いささか時のたつ速さに

驚いてしまいます。今年一年を振り返ると、本当に大変な年でありましたし、まだ明るい話題や、光が見えない、厳しい状態が続いております。

しかし、今月はクリスマスを迎える月でもあり、キリストの誕生を祝う時であります。キリストの生まれた時代は、まさに暗闇が立ちこめ、さらにキリストは馬小屋というとても人間が住むような場所ではないところで生まれられたのです。それは、「暗闇」であり「砂漠」の中でのキリストの誕生であると言っても言い過ぎではありません。

しかし、行く手に暗雲が垂れ込めようとも、無味乾燥な世界が広がっていくようとも、その奥にあるいは、その先に神の約束が実現するということが、その後の教会の歴史が明らかにしていることです。そして私たちにとっても希望なのです。アブラハムは荒れ野、砂漠へと向かい、イスラエルの民は砂漠を通って故郷カナンの地へと帰り、主イエス・キリストは馬小屋で生まれ、しかも最後は十字架という最も暗い闇の中に置かれたのでした。

しかし、それは決して無意味のないことでも、無駄なことでもありませんでした。光は暗闇に輝き、平凡でなんの変哲もない世界にかけがえのない豊かさ、尊さが秘められています。

その日、まだ暗いうちに出て行って砂漠で祈るイエス・キリストも姿は、何よりも、私たちに

希望と勇気を与えてくれます。私たちもまた、厳しい、暗い、大変に見える現実の中にあつて、なおキリストがそして多くの先人達が模範を示して、私たちに勇気と希望を与えてくれるからです。

この時、またクリスマスを迎えるこの時期、私たちは、暗闇に光が照つたこと、砂漠のような無味乾燥な世界に神は豊かに働いて下さることを、改めて心に留め、一人一人の内に、真の光、恵みがあふれるように祈りたいと思います。

(二〇一一年二月二日 大学礼拝説教)

## 「主の祈り」

大学宗教学主任

佐々木 勝彦

マタイによる福音書、第六章九節

9 だから、こう祈りなさい。

『天におられるわたしたちの父よ、

御名が崇められますように。』

今日は、「主の祈り」と呼ばれる個所の最初の部分を取り上げてみましょう。ここで言う「主」とは、イエス・キリストのことであり、「主の祈り」は、イエス・キリストが教えた祈りという意味です。キリスト教では、祈りとは神との「対話」であると考えており、その対話の際にまず語るべき言葉およびその順序を教えているのがこの祈りです。

しかし、祈りは「対話」であるという説明そのものがピンと来ないかもしれません。私たちの思い浮かべる祈りは、神社やお寺での祈りや、知人や友人の幸せ、あるいは世界の平和を祈るという形の祈りだからです。そこでは、「私」が祈るのであり、あるいは「私」が願うのであり、極

端なことを言えば、「私」が祈る必要がないと思えば、祈りません。それで何の問題も起こりません。ところが聖書は、「絶えず祈りなさい」（1テサロニケ五・一六）と勧めています。私たちの感覚で、祈るかどうかを決めるのではなく、まず祈れということです。ここには、聖書の世界観が現れています。創世記の最初の記事によると、世界も、月も、星も、太陽も、つまり宇宙も、人間も、神の意志によって造られた被造物と考えられており、それらは単独で存在するわけではありません。それらは神との応答関係の中に置かれており、神はすべての被造物との対話を望んでいます。ですから、祈るように勧められるのです。

このように、神社やお寺で、荘厳な雰囲気の中で祈るといふ私たちのイメージと、「主の祈り」の前提とする世界観は大きく違っています。したがってこの祈りの最初に出てくる「天」も、天と地という表現でイメージするような物理的空間というよりも、それらも神の被造物であるかぎりにおいて、神御自身の力が及んでいるところを指します。創造者と被造物の質的相違が強調されている場合には、この「天」は、物理的空間さえ越えていることとなります。なお、同じ「主の祈り」が記されているルカ福音書の記事には、この「天におられる」という句はありません。

イエス・キリストはこの創造者を「わたしたちの父」と呼んでいます。さらに「ゲッセマネに

おける祈り」(マルコ一四・三六)の中ではこう祈っています。「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことがおこなわれますように」と。この「アッバ」はアラム語で、「父」に親しみを込めて呼びかけるときに用いる言葉です。ですからこの個所を「お父さん」と訳している人もいます。このような表現は旧約聖書には見当たらず、イエス・キリスト独自の用法です。なぜこのような表現が可能だったのでしょうか。それは、彼が神の子だから、というのが聖書の答えです。彼だけが被造物でありつつ、同時に神であるという意味で神の子であり、父なる神に親しく呼びかけることができたのです。ところが「主の祈り」は、私たちにもイエス・キリストのゆえに、そうすることを求めています。信頼をもって呼びかけることを期待しています。

「み名が崇められますように」との祈りは、他の翻訳では「あなたの名が聖なるものとされますように」(岩波訳)とか「み名が聖とされますように」(フランススコ会訳)と訳されています。

ここで、よく分からないのが「名」という表現と「崇められる」という表現です。まず「名」の方から考えてみましょう。

創造者なる神は、人間に呼びかけ、また答えるという意味で人格的な神です。この神は、モ一

セに對して「わたしはある。わたしはあるという者だ」（出エジプト三・一四）と自ら名のつた神です。「主の祈り」の中でとなえられる「名」は、世界を作り、歴史を導き、そしてイエス・キリストを遣わした神に他なりません。

「崇める」という語は「聖とする」とも訳される語であり、「聖」は「人間を含むあらゆる被造物との隔たり」を意味しています。したがって「聖」は神の本性を表す語ですが、この神と被造物の区別を前提としながら、この神の「聖」に對する被造物のあり方を指すこともあります。しかしそもそもこの応答關係が破れている場合には、まずこの關係を修復する必要があります。聖書によると、それは創造者なる神の働きによつてのみ可能になります。それゆえ、この神は救いの神あるいは和解の神とも呼ばれます。そしてこの和解のために、父なる神によつて派遣されたのがイエス・キリストです。

したがって「み名が崇められる」とは、神と人間を明確に区別し、しかもこの人間のためにイエス・キリストを通して救いの道を開いてくださった神、つまり祈りの可能性を生みだしてくださった神を覚え、感謝し、讚美することです。

「主の祈り」が私たちの一般の祈りと大きく異なるのは、祈りにおいてまず私たちの思いを語るのではなく、私たちのために救いの業を実現される神を思い起こすように勧められていることです。

つまり祈りは、その祈りへの道を備えてくださった神御自身への感謝から始まります。しかしもちろんこれは、私たちの思いをぶつけてはならないということではありません。むしろ、この祈りが必ず聞き届けられることを信じて、ありのままに語るように勧められています。それは、「主の祈り」の後半部をみれば明らかです。

このように、「主の祈り」の勧める方向と私たちの求める祈りの方向は明らかに違ってきます。今日はまずこの違いに注目してみました。

東日本大震災の中で、私たちはしばしば祈る姿を目にしました。祈りは、人間にとつて極めて自然な行為です。しかし一方で、祈りとは何か、という根本的な問いが出てくるのも事実です。

次回は、「御国」と「御心」について考えてみましょう。

それでは最後に、一緒にこの「主の祈り」を唱和してみましよう。きっと新しい世界が開かれてくるはずですよ。

# 私はここにゐる

大学宗教授主任 北 博

## 列王記上、第十九章一―二節

1 アハブは、エリヤの行つたすべての事、預言者を剣で皆殺しにした次第をすべてイゼベルに告げた。2 イゼベルは、エリヤに使者を送つてこう言させた。「わたしが明日のこの時刻までに、あなたの命をあの預言者たちの一人の命のようにしていなければ、神々が幾重にもわたしを罰してくださるよ。」

3 それを聞いたエリヤは恐れ、直ちに逃げた。ユダのベエル・シエバに来て、自分の従者をそこに残し、4 彼自身は荒野に入り、更に一日の道のりを歩き続けた。彼は一本のえにしだの木の下の下に来て座り、自分の命が絶えるのを願つて言った。「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください。わたしは先祖にまさる者ではありません。」5 彼はえにしだの木の下で横になつて眠つてしまった。御使いが彼に触れて言った。「起きて食べよ。」6 見ると、枕もとに焼き石で焼いたパン菓子と水の入つた瓶があつたので、エリヤはそのパン菓子を食べ、水を飲んで、また横になつた。7 主の御使いはもう一度戻つて来てエリヤに

触れ、「起きて食べよ。この旅は長く、あなたには耐え難いからだ」と言った。8 エリヤは起きて食べ、飲んだ。その食べ物に力づけられた彼は、四十日四十夜歩き続け、ついに神の山ホレブに着いた。9 エリヤはそこにあつた洞穴に入り、夜を過ごした。見よ、そのとき、主の言葉があつた。「エリヤよ、ここで何をしているのか。」10 エリヤは答えた。「わたしは万軍の神、主に情熱を傾けて仕えてきました。ところが、イスラエルの人々はあなたとの契約を捨て、祭壇を破壊し、預言者たちを剣にかけて殺したのです。わたし一人だけが残り、彼らはこのわたしの命をも奪おうとねらっています。」11 主は、「そこを出て、山の中で私の前に立ちなさい」と言われた。見よ、そのとき主が通り過ぎて行かれた。主の御前には非常に激しい風が起こり、山を裂き、岩を砕いた。しかし、風の中に主はおられなかつた。風の後に地震が起こつた。しかし、地震の中にも主はおられなかつた。12 地震の後に火が起こつた。しかし、火の中にも主はおられなかつた。火の後に、静かにささやく声が聞こえた。

エリヤ物語には、多くの地名が出て来ます。エリヤはかなり広い範囲を歩き回つた末、遂にサマリアでアハブ王の前に姿を現します。当時のサマリアは、イスラエル王国、つまり分裂したイ

スラエルの北王国の首都で、宮廷がそこにありました。エリヤはアハブ王に対して、バアルの預言者達と対決することを告げます。そして対決は、北西のフェニキアとの国境付近に位置するカルメル山で行なわれました。エリヤがこの対決に際して行なったことは、かつてのイスラエル十二部族連合の原点に立つて、古い壊れた祭壇を修復することでした。エリヤはこのことによつて、イスラエルの神がヤハウエであり、フェニキアのシドン出身の王妃イゼベルが自分の出身地から持ち込んだバアルではないことをはっきりと示します。しかしそのことでエリヤは、イゼベルの恨みを買ひ、追われる身となつてしまいました。以上がこの場面の背景です。

エリヤは北イスラエルから南のユダ王国のそのまた南のほずれにあるベエル・シエバという乾燥地帯まで必死に逃走した末、遂に覚悟を決めます。しかし神の御使いに食物と飲み物を与えられて励まされ、力を得て更に南へ南へと荒れ地をひたすら歩き続けます。そして四十日四十夜の苛酷な行軍の末、遂に神の山ホレブに辿り着き、そこで神に出会うのです。

しかし、神の顕現は意外な形で行なわれました。まず、山を裂き、岩をも砕くような激しい風が吹きましたが、神はそこの中にはいませんでした。続いて地震がありました。その中にも神はいませんでした。更に火が起りましたが、その中にも神はいませんでした。そして一連の天変地異がすっかり過ぎ去り、すべてが静まり返った後に、静かにささやく声が聞こえました。そこ

でやっとエリヤは神がそこにいることを確信し、外套で顔を隠して洞穴の外に出たのです。外套で顔を隠したのは、神との出会いのためです。あまりに清い存在である神を直接目にする、人間は死んでしまう恐れがあるからです。

この物語では、神の本質について、つまり神がどういう存在であるかということについて、周到に練られた表現で語られています、まずここでは、神を天変地異と結び付ける考えが拒否されています。確かに神は、その気になれば天変地異を起こすことも出来ましようが、そこに神の本質があるわけではない。神の神たるゆえんは、奇跡を起こす力にあるわけではない。神は、奇跡を起こす力を見せつけることによって人間を服従させようとするような存在ではありません。もつとも、人間の側はそれを望むことが多いのですが。同時にここでは、神のある特定の場所、聖なる地と結び付ける考えも、注意深く避けられています。イスラエルの神は、ある人物や人々の集団を既存の場所から別の見知らぬ土地に移動させ、その旅を導く神、つまり「共に歩む神」であつて、特定の場所と結び付いた土地の守り神ではありません。これが旧約聖書の神の一つの大きな特徴です。

ところで、エリヤは静かにささやく声を聞いた時、なぜ神がそこにいることを確信したのでしょうか。ここで少し、出エジプト記三章に書かれたモーセの召命記事を読み直してみましよう。モー

セは、羊の放牧をしていました。場所はエリヤの場合と同じ、神の山ホレブです。燃え尽きない柴の中に顕現した神は、モーセに向かって虐げられたイスラエルの人々をエジプトから導き出すよう命じます。それに対して尻込みするモーセに、神はこう言います。「私は在る、あなたと共に」。更に、神にその名を明かすよう求めるモーセに対して、神はなぜか「私は在る」を何度も繰り返します。この謎めいた言葉、「私は在る」は、ある意味ではモーセの求めに対する拒絶でした。モーセは神の名を知ることによって、その奇跡を起こす力に自分も与りたいと考えたのでしようが、神は自分が地上のあらゆる存在形式に制約されることのない自由な存在であることを、ここで示したのです。「私は在る」。それによって神は、自分の存在が人間の側のあらゆる概念化を許さない、存在そのものだけということを明確にします。そうした後、初めて神は自己限定し、自らの名を開示します。「ヤハウエ」、つまり「彼は在らしめる」、これが神の示した自らの名です。すなわち、在らしめる者、出来事を起こし新しい事態を来たらせる者として、神は自らの存在を具体化するのです。そして「ヤハウエ」は、その名の通り、出エジプトという新しい事態を起こしました。

神がモーセに対して繰り返し告げた「私は在る」という言葉は、原語のヘブライ語では「エフィエ」という柔らかい響きを持つ音です。それは静かな風のそよぎのようにも聞こえる音です。エリヤが天変地異の後、その中に神がいないことを知って失望を味わいながら静寂の中にかすかに聞き

取ったのは、実には頬に感じた微かな風の音だったのではないだろうか。しかしエリヤはこの微かな風の中に、「エファイエ」、私は今ここに、あなたと共に在る、という神の語りかけを聞き取ったのです。

エリヤが追い込まれた状況は、どのようなものだったでしょうか。それは、この上もなく絶望的な状況でした。事態を一転させる奇跡的事態も起こらず、絶体絶命の危機の中で、彼は死を覚悟したことでしょう。しかしこの究極的状况の中に、エリヤは神をこの上もなく身近に感じ取り、今ここに神がいることを確信したのです。

私達は大きな災害に見舞われ、心身ともに深い傷を負いました。ある人は肉親や親しい友を失い、ある人は家を失い、ある人は仕事を失いました。誰しも、なぜ自分達がこんな目に遭わなければならぬのかと思つていることでしょう。それはまさに、神不在の状況です。しかし悲しみと苦しみの果てで、神が共にいることを感じた人、それを実感した人も多いと思います。絶望の中に微かな希望を感じ、ふと小さな力が湧いて来た瞬間がありませんか。その瞬間の希望の実感こそ、神が今ここに、わたしと共にいる、というしるしなのです。

# 「お言葉どおり、この身に成りますように」

大学宗教主任 出村 みや子

ルカによる福音書、第一章二六～三八節

26 六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。27 だ  
ビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。その  
おとめの名はマリアといった。28 天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵ま  
れた方。主があなたと共におられる。」29 マリアはこの言葉に戸惑い、いつたいこの挨拶は  
何のことかと考え込んだ。30 すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなた  
は神から恵みをいただいた。31 あなたは身ごもつて男の子を産むが、その子をイエスと名付  
けなさい。32 その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父  
ダビデの王座をくださる。33 彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」  
34 マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえますようか。わたしは男の  
人を知りませんのに。」35 天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなた  
を包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。36 あなたの親類のエリサベトも、

年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われているのに、もう六か月になつてゐる。<sup>37</sup> 神にできないことは何一つない。」<sup>38</sup> マリアは言った。「わたしは主のはしめです。お言葉どおり、この身に成りますように。」そこで、天使は去つて行つた。

教会の暦である教会暦ではイエス・キリストの降誕を待ち望む待降節（アドヴェント）に入り、夜の街ではクリスマス・イルミネーションが見る人の目を楽しませてくれる季節となりました。日本語で待降節と訳されるアドヴェント（advent）は、ラテン語で到来を意味する *adventus* という動詞に由来する言葉で、教会ではクリスマスまでの期間をアドヴェントキャンドルに毎週一本ずつロウソクを灯しつつ、イエス・キリストが人類のもとに到来した意味を思い起こしながら静かに過ごします。キリスト教国ではない日本の多くの人にとつても例年ならば待ち遠しいクリスマスですが、<sup>39</sup> 二の大震災で多くの方々が犠牲になり、故郷や住む家を失つていまだ不自由な生活が続いている方々が身近にいることを思う時、クリスマスを前に悲しみや戸惑いを覚える学生も少なくないのではないのでしょうか。キリスト教主義大学で学ぶ学生の皆さんには、今年は特に神の子イエス・キリストがこの世に到来したクリスマスの意味を静かに問うていただきたいと思います。

本日お読みした聖書の箇所は、受難・復活の記事と並んでキリスト教の歴史の中で神学的にも文化史的にも大変重要な箇所の一つです。この記事は、突然に救い主を身ごもるという出来事に直面して、戸惑い、考え込みながらも、最終的にはそれを神のご計画として喜びをもって受け入れようとする一人の若き女性マリアの心の葛藤のプロセスを見事に描いています。二八節をご覧下さい。天使ガブリエルはマリアに「おめでとう、恵まれた方、主があなたと共におられる」と告げたとあります。しかしマリアは当然のことながら、あまりに突然の出来事に当惑したことが示されています。二九節には「マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ」と記されています。マリアは天使の告知を受けた際に、なぜ自分が天使の祝福を受けるのか当惑し、考え込んでしまわざるを得ないような場面に直面したのです。

おとめのマリアに天使のガブリエルが人類の救い主となるべき男の子の誕生を告げるこの場面は「受胎告知」として知られ、レオナルド・ダ・ヴィンチやフラ・アンジェリコを始めとして多くの宗教画家が手掛けています。喜びのメッセージを伝える天使のガブリエルに対して、両手を胸の前で組んで従順に受け入れる姿勢をとるマリアを描いた「受胎告知」の美しい絵を、これまで皆さんも目にすることがあると思います。しかしこのモチーフを扱った絵画にはもちろん、当惑し、考え込んでいるマリアの姿は描かれていません。

次に三〇節以下に記された天使の告知を見てみましょう。天使は「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもつて男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。彼は永遠にヤコブの家をおさめ、その支配は終わることがない」と高らかに告げるのです。天使の告知の言葉には、救い主となるイエスの誕生がはつきりと告げられ、ここでは当時の人々がメシアの誕生をダビデの家系と結び付けていたことが示されています。東北学院大学のクリスマス礼拝では毎年ヘンデルの『メサイア』が高らかに歌われますが、まさに救い主メシアの誕生は人類に対してなされた神の大きい恵みの業なのです。

しかしマリアは天使のこの告知に対しても、「どうして、そのようなことがありえますでしょうか。わたしは男の人を知りませんのに」と当惑し、天使の言葉に反問しているのです。マリアには通常の出産とはまったく異なる出来事が告知されました。とりわけ名もなき一人の女性である自分に神が目を留め、救い主の母となることなど、マリアには想像を絶する出来事であったのでしよう。それに対して天使は三度目に、マリアが聖霊によって身ごもつたこと、「神にできないことは何一つないこと」、そしてその証拠としてマリアの親類のエリサベトも不妊の女性のまま高齢になつてしまつたにもかかわらず、神の力によって今男の子を身ごもっていると告げたのです。洗礼者ヨ

ハネの誕生です。ルカ福音書では、マリアは最終的に「神にできないことは何一つない」との天使の言葉を従順に受け入れます。そして三八節に伝えられているように、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」と言つて天使の告知を素直に受け入れているのです。

こうしてマリアが天使の告知を従順に受け入れるこの最後の場面が、有名な「受胎告知」の絵画に表現されているのですが、その際に着目していただきたいのが、宗教画家たちがその場面に一緒に、マリアの前に開かれた聖書を描いていることです。画家たちは、マリアの前にちようど旧約聖書のイザヤ書七章一四節が広げてあり、マリアは天使の告知を聞いた時に、預言者イザヤの預言の言葉、「見よ、おとめが身ごもつて男の子を生む。その名はインマヌエルと呼ばれる」との言葉が自らの身に成就したことを悟つたのだと理解しました。なぜならこのことはマタイ福音書に収録された「受胎告知」の記事にはつきりと書かれているからです。

ここでマタイによる福音書の一章一八節以下に記された天使による受胎告知の場面を見てみましょう。ここでは天使はマリアの婚約者のヨセフに対して、夢で聖霊による救い主イエスの誕生を告げていますが、二二節で「このすべてのことが起こつたのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった」と言われ、続いて先ほどの預言者イザヤの「見よ、おとめが

身ごもって男の子を生む。その名はインマヌエルと呼ばれる」の箇所が引用されているのです。そのためにマリアの「お言葉どおり、この身に成りますように」との言葉は、「聖書に書かれた言葉の通りに」と理解されるようになり、マリアは聖書の言葉を素直に受け入れる信仰者のモデルとみなされるようになりました。そしてその後の教会の歴史の中で、何ら明るい未来の到来を信じる事ができない状況の中に置かれた多くの人々は、不安や苦難の中で神の言葉に希望を託し、神にのみ信頼することをマリアに学んできたのです。

クリスマスは神の子イエス・キリストの地上への到来を喜び祝う時ですが、今年は2011年の大震災以来それまでの暮らしが一変し、不安や悲しみの中でクリスマスを迎える人々が私たちの身近にも多くおられます。東北地方に住むわたしたち一人一人が今年は何度日常の劇的变化に戸惑い、考え込まざるをえない状況に遭遇したでしょうか。わたしは今日選んだ聖書の箇所を読みながら、報道で伝えられた、震災時に出産したある女性の勇気を思い、また被災地で母となる多くの女性たちのことを思いました。皆マリアのように多くの不安と困難の中で命をはぐくみ、たくましく母となっていく女性たちです。わたしたちは自らが置かれた状況をしっかりと見つめながら、クリスマスを迎えるこの準備の時であるアドヴェントの期間、クリスマスの意味について静かに問うていきたいと思えます。

# 「豊かな世界への招き」

大学宗教授主任 村上みか

ルカによる福音書、第一四章一五―二四節

15 食事を共にしていた客の一人は、これを聞いてイエスに、「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう」と言った。16 そこで、イエスは言われた。「ある人が盛大な宴会を催そうとして、大勢の人を招き、17 宴会の時刻になったので、僕を送り、招いておいた人々に、『もう用意ができましたから、おいでください』と言わせた。18 すると皆、次々に断った。最初の人は、『畑を買ったので、見に行かねばなりません。どうか、失礼させていただきます』と言った。19 ほかの人は、『牛を二頭ずつ五組買ったので、それを調べに行くところです。どうか、失礼させていただきます』と言った。20 また別の人は、『妻を迎えたばかりなので、行くことができません』と言った。21 僕は帰って、このことを主人に報告した。すると、家の主人は怒って、僕に言った。『急いで町の広場や路地へ出て行き、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人をここに連れて来なさい。』22 やがて、僕が、『御主人様、仰せのとおりにいたしましたましたが、まだ席があります』と言うと、23 主人は言っ

た。『通りや小道に出て行き、無理にでも人々を連れて来て、この家をいっぱいにしてくれ。』  
24 言つておくが、あの招かれた人たちの中で、わたしの食事を味わう者は一人もいない。』

日々の生活をしていると、瞬く間に時間が経つてゆきます。社会人は仕事を片付けているうちに、そして学生は勉強や部活動、あるいはアルバイトをこなしているうちに、いつの間にか一日が終わり、いつの間にか一週間が終わっている、皆さんもそのような経験をされていることでしょう。このように限られた時間の中で多くの課題を抱える生活の中で、私たちはなすべきことと、そうでないことを、意識的に、あるいは無意識のうちに取舍選択しています。皆さんの中にも、それぞれ基準があつて、優先させるべきことと、後回しにすることを判断しているでしょう。その際、皆さんの基準は何であるのか、考えてみたことはあるでしょうか。自分にとつての判断基準は何なのか、そしてなぜその基準なのか、あるいはその基準は果たして意味あるものなのか、改めて考えたことがあるでしょうか。そのような問題について、先の聖書の箇所は考えさせてくれます。

ある人が盛大な宴会を催そうと多くの人を招き、その時間が来ると僕を送つて、「用意ができませんでしたので、おいでください」と誘つたところ、皆、次々に断わります。一人は「畑を買つたので

見に行かねばならない」と言い、ある人は「牛を飼ったので調べに行くところだ」と言い、また別の人は「妻を迎えたばかりで、行くことができない」と言つて、みな断わつてきたのです。これを聞いた主人は怒つて、「町に出て、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人」を連れて来るようにと命じます。そこで僕は町に出て、言われた通りに彼らを招くと、彼らはその招きに応じます。そして、招いたのに来なかつた人たちについて、主人が、彼らは「私の食事を味わうことはない」と語つたというお話です。これはイエスのたとえ話で、「神の国」について語られたものです。

「神の国」というのは、聖書では「天の国」とも表現されますが、これは死後に行く世界のことではなく、神の支配がなされるところ、神の思いが成就されるところを意味します。イエスは人々に神を愛すること、隣人を愛することを教え、神の思いに満ちた真実の世界に生きるあり方を伝えました。しかし聞いた人々は、なかなかこれを理解しないのです。人として豊かに生きるあり方へと招いても、その意味を理解せず、他にやることありますからと、なかなか応じてくれない、そのような人々の反応を、イエスは宣教活動の中で経験したのでしよう。彼の嘆きが、このたとえ話には感じられます。

私たちが、おそらくこの招きを断わる人たちと、さほど変わらないのではないのでしょうか。キ

リスト教学の授業や礼拝で聖書の話を聞いても、これは自分とは違う生き方と考える、自分とは違う世界の、自分には関係のないことと考える人もいるでしょう。あるいは、話を聞いたときには、確かにそうだと納得しても、礼拝堂を出てしばらくすると、いろいろな考えに囚われて、いつの間にか忘れてしまっている、その結果、その人の中に聖書の言葉が根を下ろすことはない…このような人々の無理解や無関心をイエスは嘆いているのです。理由はいろいろあるでしょう。そのような心の問題よりも、この厳しい現実世界を生き抜いていくためには、知識や技術を身につけ、自分の能力に磨きをかけることの方が重要だと思う人もあるでしょう。あるいは社会に出てからは、「神を愛し、人を愛す」など言っているのは、競争に負けてしまう、現実的に生き延びるための策を練ることの方が大切だと思う人もあるでしょう。これは畑や牛を見に行ったり、家庭生活を優先しようとする人たちと、同じような発想だと思います。もちろん、畑や牛を見ることも、家庭生活も、能力に磨きをかけることも、大切なことです。しかし、このような目の前の問題にのみ、心を奪われていると、そしてそのような問題が私たちの生きる目標となってしまうと、その人は人として豊かな生活を決して得ることはできないだろう、そうイエスは言うのです。そのような人々の中には、彼の「食事を味わう者は一人もない」、つまりイエスの教える豊かな世界を味わうことなく、彼らは人生を送ることになるだろう、というのです。

しかし、全ての人が招きを断わったわけではありませんでした。貧しい人々、体の不自由な人たちはやって来たのです。彼らは、当時のイスラエル社会では、評価されない人間、軽蔑される人間、自分の力では生きていけない人間でした。その彼らは、イエスの招きに応じたのです。なぜでしょう。おそらく彼らは、社会で評価を受けている人たちとは異なつて、少なくとも軽蔑されずに堂々と社会生活を送っている人たちとは違つて、気に留めなければならぬことが少なかつたのでしよう。囚われるものが少なかつたのでしよう。だから彼らは大切なことが示されると、それに素直に応じることができたのだと思います。それに、彼らは自分の貧しさに苦悩してはいたはずで、経済的な貧しさのみでなく、自分の存在の貧しさを彼らはよく知っていたはずで、だから、豊かな食事、つまり豊かな世界への招きは、本当に嬉しかったのだと思います。だから、すぐにそれを受け入れたのです。

貧しさを知る人、深い苦悩の淵に突き落とされた人々が、イエスの言葉をよく理解し、豊かな世界へ入つていったことを、この物語は示しています。そして当面やらなければならないことに心を奪われている人々は、なかなか真実を見極めることができず、当面の課題をこなしているうちに時がたち、何をやってきたのか分からない中途半端な人生を送ることになる、そのような警告がここには含まれているように思います。しかし、この中途半端な生き方は、存在の貧しさを

知ることを通して変えられることも、この物語は教えています。自分という存在の貧しさを  
知ること、私たちにもできるでしょう。そのような感性を育み、人間として豊かな生のあり方へ開  
かれてゆくことは、全ての人に可能なことなのです。自分がいったい、何を大切に生きているのか、  
そしてそれによって自分はどれだけ満たされているのか、このようなことを問い始めたいと思  
います。

# 人生を変える出会い

大学宗教授任・文学部総合人文学科助教 原 田 浩 司

## マタイによる福音書、第四章一八～二二節

18 イエスは、ガリラヤ湖このほとりを歩いておられたとき、二人ふたりの兄弟きょうだい、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレが、湖みずうみで網あみを打うっているのを御覧ごらんになった。彼らかれは漁師りょうしだった。19 イエスは、「わたしについて来きなさい。人間にんげんをとる漁師りょうしにしよう」と言いわれた。20 二人ふたりはすぐに網あみを捨てて従したがった。21 そこから進すすんで、別べつの二人ふたりの兄弟きょうだい、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟きょうだいヨハネが、父親ちちおやのゼベダイと一緒いっしょに、舟ふねの中で網あみの手入れていをしているのを御覧ごらんになると、彼らかれをお呼よびになつた。22 この二人ふたりもすぐに、舟ふねと父親ちちおやとを残のこしてイエスに従したがった。

今日の聖書は、ペトロとアンデレの兄弟、ヤコブとヨハネの兄弟がはじめてイエス・キリストと出会ったという場面です。今日の聖書の箇所から「人生を変える出会い」ということをテーマに話をさせていただきます。

今日の聖書の箇所が登場した四人は、それぞれ「漁師」として暮らしていました。おそらく、先祖の代からずつと漁師をしてきた家系だろうと思います。また、漁師以外の生き方は考えていなかったのではないかと想像されます。来る日も来る日も、ガリラヤ湖に漁に出ては魚を獲り、そして獲った魚を売って生計を立てていた。それが今日の四人の普通の暮らしでした。しかし、この人たちが、イエス・キリストとの出会いを通して、彼らの生き方ががらりと変えられていく。今日の聖書の言葉は、そのような変化が起きた場面です。そういう劇的な場面なのですが、今日の聖書では、ごくさりりとしか記されていません。

さて、皆さんの多くは、東北学院大学に入ってはじめてキリスト教に出会ったという学生がほとんどだと思えます。わたしが皆さんに期待したいことは、四年という限られた大学生活ですが、この期間に、皆さんのこれからの人生の方向性に、何かしら決定的な意味を与えるような出会いを経験していただきたいということです。

個人的な話しになりますが、わたしは東北学院大学の卒業生です。ですから、皆さんの先輩に

なります。大学三年生の時、わたしにとつて人生を変える出会いを経験しました。わたしはこうして礼拝で聖書の話をし、キリスト教学の講義も担当しています。その当時、実は、一度も教会に行つたことのない、いわゆる「普通の」大学生でした。聖書の内容とかキリスト教が教えている内容には、どちらかと言えば、さほど興味がありませんでしたが、クリスチャンの生き方には、問題意識というか、関心を持っていました。わたしは大学に入学してから、二年生が終わるまでの二年間で、クリスチャンの作家である三浦綾子さんが書いた小説やエッセイなど、文庫本で発表されている作品を全て読破しました。ですので、心の片隅に、キリスト教について、多少の関心や問題意識がありました。大学三年生の夏のことですが、ひとり、自転車で十日間ほど、三浦綾子さんが小説の舞台で書いた場所を予めルートに入れながら、北海道を旅行しました。

わたしが大学に入学した春に、最初に読んだ三浦綾子さんの小説が『塩狩峠』でした。この小説に衝撃を受け、次へ、また次へ、という具合に、三浦綾子さんの小説を読み進めて行きました。ですから、旅行を計画した時、この小説の舞台となった塩狩峠を訪れたいと思つていたのですが、当時は、今のようなインターネットもありませんでしたし、本屋で売られている市販の北海道の地図を探しても見つけ出すことができませんでしたので、仙台を出発する時のルートに、残念な

がら塩狩峠を含めることができませんでした。旅行が思いのほか、ペースが遅くなってしまったため、最北端の稚内についてから、家路を急ぐために、急きよルートを変更しました。そして、稚内から旭川に向かうルートに変更し、自転車のペダルをこいでいた時、その土地の地名を示す看板が目飛び込んできました。「塩狩峠」でした。わたしはとても驚きました。その日は、本当に想定外のことが起こりました。しかし、それをも上回るの想定外のことがこの後起きました。いろいろ話したい経緯はありますが、結論だけを言いますと、わたしはこの日の夜、三浦綾子さん本人の自宅の玄関にいました。本当に全くの想定外でした。当時の三浦綾子さんはパーキンソン病が進行していて、既に絶筆状態でした。亡くなられる3年前のことです。

玄関での束の間の立ち話でしたが、三浦綾子さんと直接お会いし、お話しをしたのですが、別際にわたしに言った言葉を今も鮮明に覚えています。わたしがおいとまする最後に、こう言われました。「あなたはこれまで教会に行ったことがありますか?」。わたしは答えました。「いいえ、一度もありません」。すると「わたしが小説の中で書いてきたことはみな、教会で語られていることです。ですから、旅行から帰ったら、あなたも教会へ行ってみてください」。はい、わかりました。そう約束して、別れました。

わたしは北海道旅行から帰り、はじめてキリスト教会に足を運びました。それが大学三年の後期がはじまった九月のことです。それから、わたしの人生が変わりました。大学を卒業後、東京神学大学に編入学し、さらに四年間学び直し、卒業後に、六年半ほど、大阪でキリスト教会の牧師として働きました。東北学院大学で過ごした学生時代に、自分が描いていた人生ががらりと変わりました。わたしは自分が全く想定していなかった人生を、今まさに歩んでいます。三浦綾子さんとの出会いは、一つのきっかけとなりましたが、本当のところは、今日皆さんと読んだ聖書の箇所で、ペトロやアンデレたちがそうであったように、わたしは、三浦綾子さんとの出会いをきっかけにして教会と出会い、そして礼拝を通してイエス・キリストとの出会いがもたらされたからです。それによって、わたしの人生は変わったのだと思います。

大学ではこうして毎日、礼拝がおこなわれています。礼拝は、イエス・キリストとの出会いが出来事となる場です。ここにいる皆さんも、礼拝を通して、キリストとの出会いを体験していただきたい。それがわたしの願いです、そして、礼拝を通して、皆さんの学生生活がより豊かなものへと変えられていきますように。そして、皆さんの人生が、皆さんが思い描いている以上に、より豊かな、そしてより意義のあるものへと変えられていきますように。そのことを願っています。

## 祈り

主なる神さま。こうして東北学院大学との出会いが、学生一人ひとりにとって、自分の生き方、自分の人生を変えるようなイエス・キリストとの出会いとなりますように。そして、東北学院の礼拝が、イエス・キリストとの出会いをもたらし、みなさんの人生を変えていく、その場となりますように。この大震災で、様々な形で、今、人生が変わった人たちがわたしたちの周囲に大勢います。今そのような状況の中でも、こうして大学での学びの生活を続けることが許され、今それぞれにこの貴重な時が与えられていることを感謝いたします。今わたしたちが過ごしているこの時を、研鑽と、自己の心身の成長と向上のために、有意義に用いることができますよう、学生一人ひとりの生活をあなたが支え、導いてください。イエス・キリストの御名によって、祈り願います。アーメン。

# 「神への問い」

総合人文学科長 原 口 尚 彰

ヨブ記、第三一章三五～四〇節

35 どうか、わたしの言うことを聞いてください。

見よ、わたしはここに署名する。

全能者よ、答えてください。

わたしと争う者が書いた告訴状を

36 わたしはしかと肩に担い

冠のようにして頭に結び付けよう。

37 わたしの歩みの一歩一歩を彼に示し

君主のように彼と対決しよう。

38 わたしの畑がわたしに対して叫び声をあげ

その敵が泣き

39 わたしが金を払わずに収穫を奪って食べ、  
持ち主を死に至らしめたことは、決してない。

もしあるというなら

40 小麦の代わりに茨が生え

大麦の代わりに雑草が生えてもよい。

旧約聖書のヨブ記は、義人ヨブの苦難を記した書物で、神が創った世界の中で、罪のない人間が何故苦しい目に遭うのかという主題をめぐる長大な戯曲となっています。ヨブは元々大変敬虔な人物で、神を敬い、悪を避ける生活を送っていました。一章二節の記述によると、ヨブには七人の息子と二人の娘があり、しかも、羊やらくだや牛やロバを沢山所有する富豪であり、何一つ不自由のない生活を送っていました。ところが、天上で神とサタンが一つの賭を行ったことで状況は一変します。サタンは神に対し、利益がないのに人が神を敬うことがあるだろうか？ヨブが神を敬うのは、神の祝福にされて財産を与えられているからであり、財産が奪われれば、神を呪うに違いないと言います。神はサタンにしたいようにするが良いと言うと、サタンは、災難をヨブに下し、ヨブの財産を奪い、子供たちを死なせました。しかし、ヨブは、「わたしは裸で母の胎

を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ。」と言つて、神を非難することなく、運命を甘受しました(一・二二)。

次に、サタンはヨブに重い皮膚病を送りましたが、それでも彼は、「わたしたちは、神から幸福もいただいたのだから、不幸もいただこうではないか。」と言つて、神を呪うことをしませんでした(二・一〇)。

ヨブの災難を聞いて、エリファズ、ビルダド、ツォファルという三人の友人が慰めるために遠くからやって来ます。この三人の友人とヨブの交わした対話が、ヨブ記三章から二八章までの内容となつています。友人たちは、ヨブの運命に同情していましたが、神は正義を嘉し、不義を罰するという伝統的な勧善懲悪の考え方に立っていたために、ヨブがこれ程の不幸に見舞われるのは何か大きな罪を犯しているに違いないと考え、ヨブに対して罪を隠さずに認めるように善意から勧めます。しかし、ヨブには全く身に覚えがないことなので、友人たちに反論することになり、両者の間に激しい論争が起ります(ヨブ記二九―三〇章)。結局のところ、友人たちはヨブを説得することが出来ないで、黙つてしまいます。友人たちを言い負かしたヨブは、最後に神に対して激しい調子で問いかけます。先程読んだ箇所はその結びのところですが、そのポイント自分は一切不義を働いていないのに、神は何故災難を下すのかということですが、ヨブ記の末尾において、

神が顕れて来て神の全能と人間の知識の限界を強調すると（ヨブ記四〇・一―四一・二六）、ヨブはひれ伏し、神を非難することを止めるので（四二・一―六）、ヨブの提起した神への問いに対する直接の答えは明確な形では与えられないままに終わります。ヨブ記を含む旧約聖書全体が開かれた問いの書を言っても過言ではないでしょう。

さて、神が創造した世界において罪のない者が何故悲惨な体験をしなければならないのか？ということは、繰り返し問われて来ました。今回の大震災においては、一万五千人以上の人々が犠牲になり、四千人近い人たちが行方不明となっています。生き残った人たちの中には、家族を失い、家を失い、工場や商店を失い、身よりも財産もなくなつて避難所に身を寄せて数ヶ月を過ごした後、仮設住宅に住んでいる人たちがあります。被災した人たちが、被災しなかつた人たちよりも罪深かつたか？と、勿論、そのようなことはなく、住んでいた地域が震源地に近かつたり、海岸沿いで津波の影響を直接に受けるところであつたりしたに過ぎません。災害という自然現象は、人間の倫理的資質に関係なく襲つて来るものであります。特に、今回の震災において甚大な被害をもたらした大津波は、繁栄を謳歌する大都市ではなく、北太平洋沿岸部の漁港や農村を襲つたのであり、自然と共生して生活していた人々が被災しました。自然は人間に対して恵みを与える反面、時として、牙を剥いて人間の生活を破壊することもあることを、今回の災害は示しました。

大災害は不道徳な人間や、繁栄に酔いしれて驕り高ぶる人間を懲らしめるために神が下した罰であるというような震災天罰論が、今回の大震災にあたっては保守派の一部の論客たちによって唱えられました。妥当ではありません。

しかし、全能の神が創造主であり、世界はすべて主の御手の内にあるのなら、何故このようなことが起こるのか、罪ない人が被災し苦しむのはどうしてなのかという問いは、ヨブに限らず人の心の中に絶えず生じて来ます。実際に同様な問いを東日本大震災に関して、日本に住む少女がローマ教皇に問うたところ、教皇は率直に自分も同じような疑問を持っていると述べました。良く考えてみると、この問いは、「エロイ、エロイ、レマサバクタニ（我が神、わが神、何故わたしをお見捨てになつたのですか?）」という十字架上のイエスの問いでありました（マルコ一五・三四）。神の子であり、罪を犯したのではないイエスが、何故、捉えられ、拷問を受け、断罪され、極悪人のように十字架刑を受けなければならなかったのか?ということは大きな謎であり、不条理でありました。それは、人類の罪を負うイエスは、不条理な苦しみの中にある人間と共に歩み、その苦しみを共に担い、共に問いつけて下さるということに他ならないと思います。「悲しむ人々は幸いである。彼等は慰められるであろう」（マタイ五・四私訳）という主イエスの言葉を頼りに歩んで行きたいと思えます。

## 「良い実」

経営学部教授

保坂和男

泉キャンパスに来ると、新一年生を迎え、新学年の始まりを強く感じます。年の始まりを強く感じます。新しい季節が巡って来て、太陽の日の中で花を見て、人生の時のうつろいを、今年は、特に誰もが深く感じていると思います。この中で普段から教会に行っていたり、あるいは、聖書を讀んだりしたことのある人は少ないかもしれませんが。東北学院に入学して良かったことの最大のことは、実は、聖書を学ぶことができることです。在学中は、感じないかもしれませんが、卒業してから、特に、東北学院に入学したことの良さに気がつくでしょう。ぜひ、聖書を讀んでください。

今朝、讀んだ聖書の箇所をもう一度、讀んでみます。

「悪い実を結ぶ良い木はなく、また、良い実を結ぶ悪い木はない。木は、それぞれ、その結ぶ実によって分かる。茨からいちじくは採れないし、野ばらからはぶどうは集められない。善い人は良いものを入れた心の倉から良いものを出し、悪い人は悪いものを入れた倉から悪いものを出す。人の口は、心からあふれ出ることを語るのである。」

考えてみれば、ぶどうはいちじくの木から採れないし、いちじくは茨から採れないし、野ばらからいちじくは採れないのは当然です。良いものを入れた倉から良いものを出せるためには、良いものを倉に入れておかねばなりません。良いものとは、私には、それは聖書の教えと覚えてなりません。

三月一日から二ヶ月半以上が過ぎました。今なお、私たちのこの地においては、多くの人たちが困難な時を過ごしており、主なる神の慰めと励まし、勇気を願うのは多くの皆さんも同じだと思います。事故の解決のために、復旧のために、再建・復興のために働いている人々の力を尊く思う思いも皆さんも同じだと思います。この三月一日には、私は結局、夕方、長時間かけて、歩いて自宅に帰りました。土樋キャンパスでは、体育館に、泉キャンパスでは一号館に避難し過ごした教職員・学生の皆さんもいました。私の家はそれほど大きな被害はありませんでしたが、停電、断水など生活の基盤は完全ストップ、スーパー等も殆ど開店して無く、一時は、近所の人と食べ物、水を分け合い過ぎていました。その後、食料については、スーパー、店がわずかに店頭で販売したので、長い行列に並んで、かろうじて手にはできたが、それも少しでした。私の住んでいた地域は、電気は四日後に復旧したものの、断水は続き、食料品も手に入りにくい状況が続いていました。ガソリンの欠乏は深刻でした。そして、情報がないこともあり、原子力発電の事故を心

配する日々でした。皆さんのかなりの人も私と同じような状況だったかと思います。

ところで、この三月一日以降、何かしら、物のとらえかたが変わったなと思う人が多いのではないのでしょうか。今まで、スイッチを押せば、電気が付き、蛇口をひねれば水が出るのが当たり前と思っていたのが、そうではないことを痛感したと思います。私たちは科学文明にどっぷりと浸って毎日を忙しく生活していますが、人間の原点は何であるのか、一番大事なことは何であるかをも知らされた思いでした。何もせず、じっと考えること、思うことの大事さを思い起こされました。

でも逆に言えば、このことは、日常の当たり前と思っていたことの貴重さに気がつかされました。ある金融機関の経営者がこんなことを言っていました。水や電気といったライフラインの重要性を痛感したが、金融機関として基本業務である預金を適切に引き出せる、決済が円滑に行われるこの重要性を再認識されられたと言っていました。このことは、どのような分野の人でもそれぞれのなすべき仕事の中でこのようなことを思ったでしょう。

私はかすかに憶えている戦後の苦しい状況を思い出しました。私も何日か近くの店や遠くの店にリュックサックを背負って行き、食料の買い出しで行列に並びました。その時、私よりも年長の方と話しました。戦後のあの頃は、並んでも、殆ど、食料等を手に入れることは出来なかった

とのことでした。今は、とにかく、食料を手にすることはできませんよとの事でした。

私は、かろうじて、仙台空襲を憶えている世代です。私たちの世代は終戦直後の頃に子供であった世代で、食糧難はそう珍しいことではありませんでした。仙台空襲の被災者であり、仙台の町の火の海を逃げ惑ったのを、幼いながらも覚えていきます。焼け出され、逃げ惑い、朝になり、おにぎりの炊き出しと乾パンをもらったのを思い出します。小学校の時、突然、アメリカ軍の自動車パイナップルを積んで学校に来たのを思い出します。講堂に全員、並ばされて、バケツ一杯に入ったパイナップルを一人ずつ渡され、食べたのを思い出します。貧しくひもじい時代を過ごしていたわが国でした。昭和四〇年頃まで、日本は貧しい国でした。我々の父母や兄弟の世代がどん底からがんばり、奇跡と言われる日本社会を実現させました。総理大臣が所得倍増論等と言いだし、皆が何を言ってるのかと思つた程でした。

この礼拝堂に集う人の多くは、一年生・二年生でしょう。人生、八〇年の時代です。人生の、約四分の一を生きてきたわけですが、これからのどのような生涯を送ることになるのでしょうか。若い皆さんがこれから送る人生でさまざまな出会いや出来事があるでしょう。自分のためにだけ生きるのではなく、社会のために、他の人のためにも生きてください。

クリスチャンとは神と人間との間のとりなしをなされたイエス・キリストの十字架による罪・

弱さの購いを信ずる者です。だからこそ、私たちも他人に対して愛を示すべきと考えます。神を見た者はいませんが、人のやさしさ、思いやり、他人への愛の中に、私たちは神を見ることができきる筈です。今朝は、良いものを入れた倉から良いものを出せるためには、良いものを倉に入れておかねばならないことを今朝の聖書の箇所から学びました。良いものとは、私には、それは聖書の教えと思えてならないことを言いました。

ここにおられる皆さんが、聖書を読んで、主の御ことばに耳を傾けることを切に願うものであります。

# キリストの救いと裁き

経営学部教授 佐藤 邦 廣

ヨハネによる福音書、第一二章四六～四八節

46 わたしを信じる者が、だれも暗闇の中にとどまることのないように、わたしは光として世にきた。47 わたしの言葉を聞いて、それを守らない者がいても、わたしはその者を裁かない。わたしは、世を裁くためではなく、世を救うために来たからである。48 わたしを拒み、わたしの言葉を受け入れない者に対しては、裁くものがある。わたしの語った言葉が、終わりの日にその者を裁く。

## 1、はじめに

今日の聖書の箇所から、イエス・キリストによる救い、裁き、そして、終わりの日という言葉を中心に考えてみたい。私にとって、イエス・キリストによる救いや恵みは、慣れ親しんだものですが、この世の終わりの日、裁きという言葉は、街中で宣伝カーが叫んでいるのを聞く程度であまり考えたことがなかった。しかし、これらの言葉は、マタイによる福音書二四・二五章、ロー

マの信徒への手紙二章、ヨハネの黙示録など多くの記述がある。これらの言葉は、われわれにとつて、また、人類にとつて、どういう意味を持つのかについて、検討してみたい。

## 2、この箇所 の 時間・空間構造とこの箇所 の 位置

今、読みました聖書の箇所は、イエスが群衆の前で話した最後の説教、今まで行ってきた伝道活動を振り返った総括の箇所などと言われているところです。この短い箇所には、いろいろ考えさせる内容が凝縮しているように思います。

まず、第一に、時間次元を考えて見ますと、終わりの日という言葉が出てきている。ヨハネ福音書を書いた著者は、一章にありますように、イエスは天地創造の初めから父なる神と共に子なる神としてあり、父なる神からこの世を救うために派遣され、この地上に人間の姿をとり誕生した。このイエスは、地上での生涯を十字架刑という形で死に、そして死から三日目に復活し、天に昇り、いまも神として万物を支配している。このイエスはまた、この世の終わりの日に、再びこの世に来て人々を裁くと記されている。

このことを考えますと、現在は、天地創造の初めから、終わりの日までの中間の時代といえる。キリストが神の言葉を述べ、そして、その言葉と、イエスが神であることを、弟子と教会が受

け継ぎ、それを伝えている時代といえる。しかし終わりの日はいつ来るかは解らなく、思いがけない時にくる（マタイ二四・四四）と記されている。

第二に、空間次元あるいは垂直次元を考えて見ますと、この箇所は、この世とこの世をこえた天の存在を示している。四九節にありますように、天に存在する父なる神がイエスを地上に派遣し、イエスは、その神の言葉を光として話しているという構造になっている。そして、そのイエスの言葉が、われわれに語られ、我々に信じるようにと語りかけている。

### 3、救いと裁き、そして、新しいエルサレム

以上の理解のうえで、今日の主題、救いと裁きについて検討してみると、四六節にありますように、私と述べているイエスは、暗闇であるこの世を救うために、光として来た。闇とは、悪や悪い行いが横行し、神の存在を信じないで、人間が作った神を信じている状況、そして、現在では、神や超越者の存在を否定し、科学や経済的豊かさや富を信じ、追求している、われわれの世界のことである。ローマ信徒の手紙の一章には、人類の罪という見出しの下に、より詳しく、正確に書かれている。

イエスは、父なる神の人間への愛から、また、死に値するこの闇の世界を破滅から救うために、

光として神から派遣された。そして、万物の創造者である神の存在を信じるように、また、神が人間に示す真理を、言葉として語り、自らが神の子であることを、言葉と行為、死と復活によって示した。イエスの人々への語りかけは、神を信じることにより、人間は死から解放され永遠の命が与えられること、また、神から与えられる聖霊により導かれ、日々の生活に恵みと平安、喜びが与えられることなどである。マタイによる福音書の五章から七章の山上の説教はイエスの教えとして代表的である。

しかしこのようなイエスの教えを拒む、あるいは受け入れない人々に対して、イエスは、神の言葉と話したのに拒否し、受け入れないことは、神を拒否し、神に敵対することであることを示した。しかし、今は、救いの時として拒否する人を裁かないと述べている（四七節）。すなわち、今は、終わりに至る救いするとき、教会のとき、神の言葉を伝える時である。しかし終わりのとき、神の正義と真理が完全に実現するためには、悪や虚偽が、排除されなければならない。光がこの世を覆うとき、闇は消えなければならない。このときが裁きのとき、終わりの日である（四八節）。救いと恵みの言葉の時代は、人間に悔い改めて神に帰れという猶予のときである。

しかし、ヨハネの黙示録によると、終わりの時が近づくとき自然をも支配する神が、自然災害を通じて人間に悔い改めを迫ることが書かれている（黙示録八章、九：二〇―二二）。人間の力を

超える神の存在を示し、神の怒りを示し、人間に悔い改めを迫るためである。

#### 4、主の来臨の約束

さて最後にイエスの弟子であったペテロの手紙二の三章にある箇所を簡略化して紹介し結論としたい。愛する人たち、主の下では、一日は千年のようで千年は一日のようです。主は約束の實現をおくらせているではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、忍耐しておられるのです。その日、天は激しい音を立てながら消えうせ、自然界の諸要素は、熱に溶けつくし、地とそこで造り出され物は暴かれてしまいます。このようにすべてのものは、滅び去るのですから、あなたがたは聖なる信心深い生活を送らなければなりません。私たちは、義の宿る新しい天と新しい地とを神の約束に従って待ち望んでいるのです。

私たちは、この救いの時代のときに、イエスの言葉によって、万物の支配者である全能の神に立ち返り、救いと喜び、真理と知恵を与える神と共に生きて行きたいものです。

# 復興の担い手

法学部准教授 横 田 尚 昌

マタイによる福音書、五章一三節～一六節

13 「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によつて塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。14 あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。15 また、もし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家中のものすべてを照らすのである。16 そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」

みなさんは、本学に入学してからこの方、右のみ言葉を様々なところで折に触れて聴かれてこられたことと思います。しかし今なお、このみ言葉の深みを知り尽くすことはできない思いでおられるのではないのでしょうか。もちろん、私も同様であります。そのような私があえてこのみ言葉を本

日この場で考えてみようと思いましたが、さる三月一日午後には発生した東北地方太平洋沖地震による東日本大震災に対する国の復旧措置の不備や復興対策のもたつきを、人々がこぞって批判し、ときに国の担当者を揶揄する風潮すら見受けられる状況があるからです。すなわち、自ら復興に尽力することを忘れて一方的に政府を批判するのは、いかがなものかと思われるのです。もちろん、今回の東日本大震災に対する政府の対応に問題があることは事実ですし、また大地震による被害状況は、まことに個人差、世帯間格差が大きいのが実情です。たとえば、これまで実直に仕事をしてきて人々からも慕われる良い人が死亡したり行方不明になったりする一方で、まことに困った人々と人々から思われている人が、さしたる震災の不自由もなくあんのんと暮らしているかもしれない現状を目の当たりにすると、まことにやるせなく、手をこまねいている政府へのいら立ちが募り不満が鬱積するのも、むりからぬことかもしれません。

しかし、ここで少し考えてみなくてはならないことは次の点です。東日本大震災のうち東京電力福島第一原子力発電所の事故による放射能被害については、一連の報道からも窺われるように人災の面がなくはなく、また原子力発電を推進してきた国にもそれなりの責任が問われる余地があります。これに対して、東北地方太平洋沖地震の発生そのものにもとより国は関与しておらず、続く津波発生に対する防災対策の不備についても相対的な問題として論じざるを得ないのです。

したがって、国が東日本大震災に対する復興措置を講ずるとしても、これはあくまでも復興支援であつて、復興請負ではないのです。国は、地域の人々が自力で立ち上がるのを手助けし、利害を調整して、規制を緩和するなどしながら、人々が少なくとも健康で文化的な最低限度の生活を送れるように援助することがその役割であり、再び地域が活気づくようになることを努力目標とするとどまります。つまり、国が復興の完成義務を負っているといはいい難いのです。

復興の本来の担い手はあくまでも我々地域住民であり、地方自治体の首長を動かすのも地域住民の声であり頑張りです。それゆえ、復興の成否は我々地域住民の腕と団結力にかかっているといつても過言ではありません。

したがって、国への批判についても、たとえば復興に向けて懸命に汗をかいている地域住民の人たちが、国の支援は効率的でなく、また規制緩和や復興計画策定のスピードが欠けているといつて不備なところをピンポイントで批判し是正を促すのであれば、これは意義のある（いわば生産的な）批判だといえましょう。

これに対して、持てる力を出そうともせずに、目先の悲惨な状況ばかりに圧倒されて先行きの不安から何も手につかず日々を無為に過ごしている人が、国の支援の不備やもたつきをいくら批判しても、いったいそれが何の役に立つのでしょうか。何を目指しての批判なのかがよくわからず、単

なる不満の表明にしか映らないことになりましょう。

そもそも、批判というのは自ら努力することを怠らない者が行つてはじめて意味を持つのであつて、無策なままに過ごす自分のことを棚上げにして人の怠慢を批判するのは、あたかも塩気の無くなつた塩を対象に振りかけているようなもので、味付けにもならなければ防腐剤にもなりません。塩を振つた気になつていただけの何の生産性もない行いなのであります。

また、震災からの復興は、一人ひとりが少しずつ力を出し合つて、皆が丸となつて、よりよい方向へと歩んで行くようにしなくては成就しないと思います。なぜなら、個々人が自分たちの生活のためだけに、いくら一生懸命努力をしても、それだけでは復興は覚束ず、社会は一向によくならないからであります。

保身に走らず、私心を捨てて、みずからの持ちうる力を皆の復興のために役立てるとき、その人に宿つた力は人々の助けを得て、幾倍にも輝きを増し、暗澹たる被災地を広く照らして先行きまで明るくすることになると思います。

そのような人たちこそが、世の光になることのできる人たちだと思ひます。

すなわち、ともし火をともして燭台の上に置けば、家の中のものすべてを照らす、そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい、というみ言葉は、今述べたことのように思われるのです。

そして、そのようなもし火がともるところにこそ、人々が奇跡と称賛するような復興が成り立ち得るのだと考えます。

最後に申し上げます。

復興とは、次の世代につなげられるものでなくては意味がありません。復興してはみたものの、後に残ったのはお年寄りばかりの過疎に悩む町というのでは元も子もありません。若いみなさんが、復興に関与してこそ真の復興がなしとげられるのです。

ですから、たとえば、地元ではよい就職先が見つからないといって、この町をはなれて就職することを考えている人が、国の復興支援体制の不備を批判し、それゆえにこの町を離れるのだと言ったり、求人企業が増えないのは国の無策ゆえだと言ったりするのは、これもまた塩気のない塩を振りかけているようなものです。なぜなら、自らに復興の手助けをしようとする気持ちの無い人が、復興の不備について批判したところで、何の役にも立たず、その批判はいずれ外に投げられ踏み潰されるだけのことからです。

就職先は、さがせば見つかります。見つからなければ、とにかく食べていかなくは、という思いで探してください。神の栄光を信じ祈る先にこそ、自分にとって最善のなりわいがきっと見つかるはずですよ。

どうか、この地元のために、地元を復興させるために、みなさんお一人お一人が持てる力を出し  
尽くしてください。

そして、若い皆さんが、この街を、この地域を見捨てないことこそが、ただ、それだけのことが、  
最大の復興対策になるのであると信じます。

お祈りをいたします——

# 「あちら側」からの視線

経営学部准教授 松村尚彦

コヘレトの言葉、 第二二章一節

「青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ。」

苦しみの日々が来ないうちに。

「年を重ねることに喜びはない」と

言う年齢にならないうちに。

夏休みが終わって、久しぶりに寮生の皆さんとお会いでき、とても嬉しく思います。大学に入り、そして親元から離れた生活をした後、はじめて迎えた夏休みはいかがでしたでしょうか？

久しぶりに帰った実家は、皆さんが大学に来た四月のころと変わりはありませんでしたか？もちろん物理的には何も変わらないと思いますが、もしかしたら皆さんが一人暮らしをした数か月間の間で、皆さん自身が成長し、変化した分だけ、少し違って見えたかもしれません。たとえば家のリビングはこんなに小さかったかなとか、ご両親はこんなにやさしかったかなあとか、以前とは違う

何かを感じた人も多かったことでしょう。

みなさん位の年代、つまり二十歳になる少し手前の時期というのは、精神的に大きな変化を経験する時です。今までは色々な意味で保護をされていた。そうした状態から自分で独り立ちをする準備の過程に入っていく。そして今まであまり気にとめていなかった人生の違った側面についても、少しずつ気付いてくる時期でもあります。

私は大学時代テニスのサークルに入ったり、ゼミの勉強を一生懸命やったりしていましたが、あのころの自分の心の中を振り返ってみると、自由だ、楽しいという気持ちで一杯でしたが、その半面で「何かかが足りない」「何か足りないんだけど、それが何だか分からない」というような、どうにもならない、その正体すら分からない不安を前にして、いらだちを感じるものが良くあった、そうしたことを思い出します。

私の時とは時代が大分違いますが、それでも学生の話の聞いていると、今でも「なんだか正体の分からない不安」に悩まされている、あるいは「自分は幸せなはずなんだが、何だか物足りなさを感じてどうにもならない」と思っている学生が少なからずいるんだなあと感じるものが時々あります。

たとえば、何年か前に皆さんの寮の先輩が、「旧約聖書のコヘレトの言葉は深いですね」と言っ

てきたことがあります。今日はコヘレトの言葉の最後の部分だけをお読みしましたが、コヘレトの言葉の前半のテーマは、人生の空しさということです。

人生に成功して金持ちになった人の心の告白を通して、あるいは一生懸命勉強して世の中の知識を極めつくした人の心の告白を通じて、また快楽を追求して欲しいものを全て手に入れた人の心の告白を通じて、コヘレトは人生の空しさ、つまりこの世には人の心を満たし続けてくれるものは何一つないということを解き明かします。

言い換えると、そうした人生のむなしさ、あるいは先ほどの言葉でいえば、「なんだか正体の分からない不安」は、どんな人であっても逃れることのできない悩みであり、自分の力だけではどうすることもできない人生の暗さだということです。

実はこのことに関連して、以前ある人からとっても面白い話を聞きました。その話を聞いた時には何か久しぶりに自分の心の中に光がさしてきたような、そんなとても印象深い話だったので皆さんにも紹介したいと思います。

その話をしてくれた人が子供の頃に、親戚のお兄さんが冬山で遭難にあつたんだそうです。冬山では雪崩に会ったときには、その場から動いてはいけないというのが鉄則です。動くことが、また雪崩を誘発して二次被害が起きるといけないからです。

もちろん、そのお兄さんもそのことは良く分かっていたのですが、いざ自分が遭難すると、不安に駆られてじっとしてはられず、ゆるくなった雪の斜面をどこに向かってよいかも分からないまま、あっち、こっちと動いていたそうです。人間自分の命が危なくなると、色々ジタバタしてしまつてかえつて状況を悪くしてしまうものです。

そんな時に遠くから救援のヘリの音が聞こえてきたということです。そしてこの人は、これで助かったという安堵感から、おもわずヘリの方に向かって歩き出そうとしたそうです。まさにその時です。ヘリからマイクを通じて「動かないでください。」「危険ですから動かないで下さい。」「という警告が聞えたかと思うと、その直ぐ後にヘリの救助の人が「こちらからはあなたが見えています。だから必ず救助しますので、安心してください。』と呼びかけてきたということです。

「こちらからはあなたが見えています。だから安心してください。』」

この言葉を聞いたときに、「うーん、この感覚どこかで自分も体験したコトがあるぞー」という既視感というかデジャブーというか、そんな不思議な感じがしてハッとさせられました。

それは私が学生時代に悩んでいた「なんだか正体の分からない不安」、そこから抜け出すきっかけ

となった、私にとってはとても大切な神様との出会いの経験とそっくりだったのです。神様との出会いは、何か髭を生やした仙人のような人と出会ったということではありません。そうではなく、あたかも遠くの方から「ここからはあなたが見えています。だから安心しなさい。」という声を聞くような経験でした。それは、これまで知らなかった「あちら側からの視線」に気づく経験であり、ずっと視線を私に送り続けてくださっているお方の存在に気づかされる、そんな経験であったのです。

「青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ。」

今日の聖書の箇所は、私たちに「人は一人ぼっちではないんだよ」と語りかけています。私たちが造られた方がおられること、そのことに気づき、それに心を留めること、それが人生の空しさから救い出す唯一の道だ、聖書はそのように述べているのだと思います。

# 「父のつくったネギです」

工学部准教授 長島 慎 二

## 創世記、第四章一節～五節

1 さて、アダムは妻エバを知った。彼女は身ごもってカインを産み、「わたしは主によって男子を得た」と言った。2 彼女はまたその弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。3 時を経て、カインは土の実りを主のもとに献げ物として持つて来た。4 アベルは羊の群れの中から肥えた初子を持つて来た。主はアベルとその献げ物に目を留められたが、5 カインとその献げ物には目を留められなかった。カインは激しく怒って顔を伏せた。

今年の四月一五日のことでした。誰もいない研究室に入ると、わたしの椅子の後ろに泥のついたネギの入った袋を発見しました。袋には一枚の手紙が添えられていました。次のように書いてありました。

「長島先生、父のつくったネギです。食べてください」

今年、大学を卒業した前年度の研究室の教え子のひとりからの贈り物でした。その教え子を以下 M 君としましょう。M 君は、今年の二月にお父さんを失いました。急逝でした。すぐに連絡して研究室の学生たちと葬儀に参列しました。M 君は、随分と動揺しているようでした。M 君の家は專業農家でした。お父さんの死は突然のことでありましたし、お父さんは文字通り一家の大黒柱でした。息子は M 君ひとりでした。M 君は内気な性格で、專業農家であった実家を継ぐべきか否かで悩み、就職を決めていませんでした。葬儀のあとのいろいろな手続きや挨拶廻りを終えてから、M 君は、お父さんのかわりに苗づくりを始めました。そのさなかにあの大地震が発生しました。M 君の自宅はすぐ近くまで津波が押し寄せましたが大丈夫でした。しかし、仙台市の六郷という海の近くに所有していた田圃は津波をかぶって使えなくなっていました。大震災が引き起こした悲劇のひとつでした。M 君ばかりではなく、人々は皆、自分のことでいっぱいでありました。そうした中で M 君はわたしにネギを持って来てくれたのです。しかも、それはお父さんが作った最後の作物だったのです。

先月、十一月のことでした。バンと音がするぐらいに勢いよくドアを開けて研究室に入ってきた男がいました。M 君でした。研究室を訪問することについては事前に知らされていませんでした。M 君はつなぎを着て、泥だらけの長靴を履いていました。畑から抜いてきたばかりという長ネギと

玉ねぎと、今年できたひとめぼれ十キログラムをわたしに贈るためにやってきたのでした。M君の家は、仙台市の六郷の田圃は使えなくなりましたが、中新田にも結構、田圃を所有していて米を作ったのでした。それは、M君が初めて、生産者として、お父さんに頼らないで種をまき、育て、収穫した今年の初物でした。

聖書を読むと、収穫の初物を神様に献げるという習慣があったことがわかります。これは、旧約聖書に基づいており、申命記には次のような記述がなされています。

「あなたの神、主が嗣業の土地として得させるために与えられる土地にあなたが入り、そこに住むときには、あなたの神、主が与えられる土地から取れるあらゆる地の実りの初物を取って籠に入れ、あなたの神、主がその名を置くために選ばれる場所に行きなさい。」（申命記二六章一節～二節）

この箇所は、イスラエルの民がエジプトを脱出した際の律法ですが、創世記の最初のカインとアベルの物語に、すでに初物を献げる話を見ることができます。エデンの園を追放されたアダムとエバから最初に生まれた人、すなわち、人から生まれた最初の人はカインであり、その弟はアベルです。カインは土を耕す者となり、アベルは羊を飼う者となりました。時を経て、二人は、それぞれの収穫物を、すなわち、カインは土の実りを、アベルは羊の中から肥えた初子を神に献げるために持ってきたのです。ところが、神様はアベルの献げものには目を留められましたが、カインの献げもの

には目を留められませんでした。

初めてこの箇所を読んだときは、神は随分と不公平だと感じたものです。カインがかわいそうだと感じたのです。おそらく、みなさんも同じでしょう。神は依怙鼻肩をしているのではないかと。それは、ひとつにはアベルの献げ物には目を留めたけれども、カインの献げ物には目を留めなかった理由が記されていないからです。しかし、そのような読み方は間違っています。そのように感じるのには、どこまでも自分中心、人間中心に聖書を読んでいるからです。あるいは、聖書に示される神を、少し大げさに言えば、わたしたち人間と同格の存在として意識しているからでしょう。聖書は、神は正しい方として示しています。カインとカインの献げものには目を留められなかった。そこに、カインの心の問題が十分に顕されているのです。

聖書の神は、わたしたちの心を見られる方です。わたしたちの日々の全てが神の恵みによるものです。そのことを深く心の中で感謝し、喜ぶことを神に表すために、初物の献げ物をすることが許されているのです。

さて、先に紹介した教え子は、驚くことに、お父さんの人生最後の作物と、自分が独力で作った人生最初の作物をわたしにプレゼントしてくれました。お父さんを亡くして、あらためてお父さんの偉大さに感謝し、また、周囲の助けを借りながらも、自分で初めて収穫を行うことができた感動

が伝わって来ました。彼の温かい気持ちを感じました。先月、研究室で会ったM君は、内気で悩んでいた学生時代のM君ではありませんでした。悲劇を乗り越えた体験を通して、感謝と確信を持つに至ったのでしょうか。

わたしたちも、神様に心から献げものをしたいと思えます。祈りましょう。

# 声の大きさと正しさ

工学部教授 星宮 務

## イザヤ書、第二章一〜一二節

11 ドマについての託宣。セイルから、わたしを呼ぶ者がある。「見張りの者よ、今は夜の何どきか 見張りの者よ、夜の何どきなのか。」<sup>12</sup> 見張りの者は言った。「夜明けは近づいている。しかしまだ夜なのだ。どうしても尋ねたいならば、尋ねよ。もう一度来るがよい。」

## ルカによる福音書、第二章一〜七節

1 そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。(中略) <sup>6</sup> ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、<sup>7</sup> 初めてのの子を産み、布にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。

一二月のクリスマス前に礼拝の担当にあたりました。クリスマスまでの四週間は待降節 (Advent) と呼ばれていて、一週間ごとに教会堂にともるろうそくを一本ずつ増やしていく習慣があります。

また、クリスマスには「きよしこの夜」（一〇九番）をはじめ、さまざまな有名な讃美歌が歌われます。讃美歌の上に書いてあるテーマ名で申しますと「待降」（イエス・キリストの誕生を待ち望むこと）と「降誕」の二つ、本日歌いました九四番から始まって一一九番までがクリスマス・ソングと言ったことになっております。

約二〇〇〇年前のユダヤ（今のイスラエル）では巨大なローマ帝国の支配下にあつたために、民族が解放される「夜明け」を待ち焦がれる気持ちに満ち溢れておりました。本日の聖書の最初の箇所にかかれてるように、夜の明ける朝の訪れを夜回りしている見張りのものに何度も何度も尋ねるように、民族の解放者を待ち受けている状況でした。

ご承知のように、イエス・キリストは民衆たちから当初、ローマの支配からユダヤ民族を政治的に解放する「救世主」と考えられ期待されておりました。そして、イエスの目指すものが心の内なる問題であつて、直接の政治的武装蜂起とは異なる方向だと分かつた民衆から失望され、結果的には十字架につけられていく経緯が聖書の記事にしるされております。

本日二番目に読んだ、有名なルカによる福音書に記されているイエス・キリストの誕生の記事を見てみましょう。イエス・キリストは他の箇所（マタイ福音書二章二節）では「ユダヤ人の王としてお生まれになった方」と書いてあるのに、この箇所では貧しい厩（うまや）で生まれて布にくる

まれて飼葉桶に寝かせられていた、と書いてあります。清潔であるべき新生児が、まるで人間扱いされておりません。この箇所はとりわけ深いメッセージを私たちに与えてくれる箇所だと、思います。

普段の生活で私たちは、例えば私などは工学系の仕事をしておりますので、プライオリティー（先優権）を大事にし、より良いプレゼンテーションを目指します。

手っ取り早く言う、「早いものが勝ち」であり、「わかりやすく伝える事が大事」、言い換えると「声の大きいものが勝ち」と、いうような日常を送っております。

その様な私たちの考えかたからストレートに考えれば、「救い主」が王宮でお生まれになるのならわかるのですが、一番不潔な馬小屋で生まれる、というのは理解しにくい事があります。

問題の設定を変えてみましょう。最近日本にブータンの国王ご夫妻が訪れました。インドと中国の間にある国で、経済の水準などは日本よりはるかに低いのですが、「国民の幸福度」という尺度では世界一の国であるそうです。

「幸福」とは何か、と問うと余りにも哲学的になってしまい、私にはとても答えを出せそうにありません。

ただ、私は、「世の中に『勝ち組』』という言葉があり、『声の大きいもの』、『力の強いもの』が勝ちだ』という一直線の論理には疑問を感じています。皆さんにも一緒に考えて欲しい疑問です。

一つだけ、私が思い出してお話したい事があります。もう四〇年近く昔の事なのですが、大学が大きくその存在を問われた時代がありました。その当時、大学の中でも教授や助手、学生たちがお互いに真剣になってさまざまな討論を互いに交わしたのです。

その様な状況の中で、一人の高名な社会学者が、声高に叫ぶ若い研究者に対して、静かな声で「あなたの声の大きさが、あなたの正しさを証明しはしませんよ」

と答えられたのです。

私はこの記事を読んだ時、体が戦慄いたしました。うまく表現はできないのですが、私が常日頃大事だと思っていた「プライオリティー（先優権）やプレゼンテーションの上手下手、声の大小」などの現世的事情がらを超越した、私たちの従来の価値を根本から転換させる何かが、この世にはあるのではないか、この短い言葉から私はそう感じたのです。

イエス・キリストが馬小屋に誕生された事がキリスト教のバイブルに正々堂々と誇り高く表現され

ております。この事は、世の中で俗にいう「力の強いもの」、「豊かなもの」、「声の大きいもの」が正しい、という一直線の論理とは全く異なつた価値を私たちにはつきりと提示しているものです。

今年まためぐつてきたこのクリスマスシーズンは、そういう「価値の転換」を覚えてくれるキリスト教の学校に私たちが学び、勤めているのだ、という自覚を私にまた持たせてくれ、思いを新たにしてくれた次第です。

祈ります。

## ある日の音楽礼拝

教養学部教授・大学オルガニスト

今井 奈緒子

六月六日（月）土樋キャンパス六号館六〇一教室 司会…佐々木哲夫 宗教部長

〔聖書箇所〕 旧約聖書 詩編第二二編二五〜二六節

〔演奏曲目〕 J・S・バッハ（一六八五〜一七五〇年）クラヴィーア練習曲集第三部より「い

と高きところには神にのみ栄光あれ」BWV675（前奏）「キリエ、とこしえの父なる神よ」

BWV672「キリストよ、世の人すべての慰め」BWV673「キリエ、聖霊なる神よ」BWV674「い

と高きところには神にのみ栄光あれ」BWV676「天にましますわれらの父よ」BWV683（演奏）

「これぞ聖なる十戒」BWV679（後奏）

一九三二年（昭和七年）に建てられたラーハウザー記念礼拝堂天井の一角が、あの激しい地震のゆえに崩落しました。そこで毎日の礼拝をこの六〇一番教室で守るために、ポジティヴ・オルガンを運び込むこととなったのです。「ポジティヴ」とは、複数の鍵盤を持つオルガンの、主鍵盤とは異なる鍵盤（ヴェルク）を指す用語でもあります。一方「ポジション」に由来するとの説明も可能

です。礼拝堂の一部として据え付けられている大オルガンとは異なり、必要とされるところへ運んで行って配置し、用途に応じた調律を施して使用する、かたちは小さくてもパイプオルガンです。この楽器は手鍵盤一段、四種類のストップを持つのですが、通常の礼拝と同じく前奏・後奏を奏で、賛美をリードし支えます。

今日はいずれもバッハの、教理問答歌やその他の讚美歌に基づく種々の前奏曲を集めた、オルガンのための《クラヴィーア練習曲集第三部》（この時代の「練習曲集」は、ある用途を持ったひとまとまりの作品という意味を持っていました）より、手鍵盤のみで弾くことのできる数曲を演奏します。ラーハウザー記念礼拝堂に、オルガンと共に再び力強い賛美の歌声が響く日を心待ちにしながら、私たちオルガニストはこの場所で、日々の礼拝を奏樂しています。

一〇月二二日（金）多賀城礼拝堂 司会…原田浩司先生

〔聖書箇所〕 マタイによる福音書 第六章七〜一三節

〔演奏曲目〕 M・プレトリーウス (ca.1570-1621) 「いまぞわが魂、主をほめたたえよ」(前奏)

D・ブクステフーデ (1637-1707) 「ニール編曲」私たちから取り去ってください、主よ、まことの神よ」(全4節) BuxWV207 (演奏) J・S・バッハ (1685-1750) プレリユード ハ長調 BWV545 (後奏)

ミヒャエル・プレトリーウスは『シンタグマ・ムジクム（音楽大全）』全三巻を著したことも知られる作曲家、オルガニストです。「いまぞわが魂、主をほめたたえよ」はコラールの旋律が技巧的なパッセージを絡ませて進み、特に旋律の最終部分では幾重にも繰り返して変奏されます。ブクステフーデはバッハに先立つこと約五〇年前、デンマーク領ヘルシンボロに生まれ、ハンザ同盟都市のリューベックで活躍した、北ドイツオルガン楽派を代表する人物です。バッハが、教会音楽家として名高い彼の活動に学ぶため、故郷アルンシュタットから徒歩でリューベックを訪ね、当初の約束であった4週間をはるかに越える期間を、しかも雇い主に断りもなく当地に滞在したため、帰郷後に聖職会議で叱責された話はよく知られています。「私たちから取り去ってください、主よ、まことの神よ」は「天にましますわれらの父よ」（主の祈り）の歌詞で歌われることも多い、M・ルター作曲の有名なコラール（ドイツ語の讚美歌）旋律に基づく変奏曲です。当時のコラール本は、同じ旋律に異なる歌詞をつけて、あるいは逆に同じ歌詞を異なる旋律で歌う、いわば替え歌集だったのです。この作品では、コラール旋律を四節とも最上声部に置いて編曲されています。第一節の歌詞は「私たちから取り去ってください、主よ、まことの神よ、重い罰と大きな苦難を。これは、私たちの数知れぬ罪がごとく自ら招いたもの。守りたまえ、戦争や飢饉から、疫病から、火災や大きな苦

しみから。」と歌います。いまの私たちが置かれている現実にも、相通する内容ではありませんか。後奏に用いるプレリユードは、バッハがリユーベックで見聞した楽器と音楽の影響を彷彿とさせる作品です。

一〇月三二日（月）土樋キャンパス礼拝堂 司会：佐々木哲夫宗教部長

〔聖書箇所〕 旧約聖書 詩編第百十九編九〜十六節

〔演奏曲目〕 J・S・バッハ（1685-1750）「リール編曲「神は我が堅き砦」 BWV720（前奏）

S・シャイト（1587-1654）原「リールの4声体編曲」M・プレトリウス（1571-1621）「リール編曲「神は我が堅き砦」（演奏） J・パッヘルベル（1653-1706）「リール編曲「神は我が堅き砦」（後奏）」

神はわが堅きとりで Ein feste Burg ist unser Gott は、宗教改革者マルティン・ルター作詞作曲によるコラール（ドイツ語の賛美歌）で、宗教改革記念日（一〇月三二日）のテーマソングになります。ルターは、マイスタージンガーで知られる実在の靴職人ハンス・ザックスも認める美声を持ち、音楽的資質にも恵まれていました。フランドルの巨匠ジョスカン・デ・プレもルターを評価していたと言われます。従って彼の「改革」は讚美歌にも及びました。既成の聖歌を翻訳し、旋律はドイ

ルター〈神はわが堅きとりで〉の楽譜

Der 150. Psalm / Deus  
noster refugium et  
virtus / etc.

Martinus Luther.

So. 49

se sind / mit cristen ist mein / gros  
(macht und

wiel lust / sein gesamst rüstung ist / auff  
er ist

nicht sein gleich.

Es ist unser macht ist unser gütlich  
wie sind ges bald verlor / Es ist  
für uns der cristen man / den Gott hat  
selbe

(日本キリスト教団出版局『キリスト教音楽の歴史』より)

ツ語のアクセントに応じて書き換えたり、民謡など庶民に親しみのある素材を活用したのです。「神はわが堅きとりで」は、バール形式 (aab 型) 前半を繰り返し、後半は前半より長い展開を見せる) という旋律構造に則って書かれました。「歌曲たるものバール形式で書かれねばならない」とまで言われた時代です。古めかしい教会旋法から解放されて、改革の息吹が聞こえます。この伝統がプロテスタントのコラールに受け継がれ、オルガン用にも多数編曲されました。原曲を同じくする、それぞれの作曲家の編曲でお聞きください。

一月一日（木）泉キャンパス礼拝堂 司会：永井 義之 大学宗教主任

〔聖書箇所〕 ルカによる福音書 第二章二五～三三節

〔演奏曲目〕 G・コレット (ca.1670-1733) 第八旋法によるミサ曲より グラン・プラン・プラン・ジュ  
／ナザールのレシ／ティエルスをテノールで（前奏） D・ブクステフーデ (1637-1707) コラー  
ル編曲「平安と喜びもてわれは逝く」全五曲（演奏） G・コレット 第八旋法によるミサ曲より  
二つの鍵盤によるプラン・ジュ（後奏）

泉礼拝堂のオルガンは、ストラスブルにある Alfred Kern et Fils 社で製作され、一九八九年に設置されました。先の大震災ではパイプの破損などに加え、激しく複雑な震動の影響で、音に著しい狂いが生じ深刻な状態となりました。製作者が来日して二期にわたる修復が行われた結果、本来の美しい音色と響きが戻りましたので、今日の前奏と後奏では、フランス古典の特徴ある音色でその一端を紹介したいと思います。

ところで一月は、キリスト教会では聖人たちや、先に天国へ旅立った人たちを憶えて祈る礼拝が守られます。そこで、ルカによる福音書に記された「シメオン老人」の物語を下敷きとし「死と永世」のカラーに定められている旋律を用いた、ブクステフーデ編曲のオルガン作品を聴いてください。

ブクステフーデは父の死に際して自ら「哀歌」を書き、この作品の最終変奏としました。作風は古めかしく少しもの悲しい感じが支配しますが、やはりオルガンの名手であった父への、尊敬と惜別の念が表現されています。

independence. All we have we have received from God, our Creator. Every breath we take is a gift from the God who loves us daily, hourly. In this spirit, the psalmist David comments that giving thanks to God is a pleasant and even joyful experience (Psalm 54).

Perhaps now you can understand more fully why we so often sing hymns of praise to God in our worship services at Tohoku Gakuin. Being a Christian is living a life of praise and thanksgiving to God. If we could not sing of our thanksgiving and praise to God, our lives would be sad indeed. The words of "Now Thank We All Our God" were written during the dark years of the Thirty Years War (1618-48) when people were witnessing death and destruction all around them. The author of the words, Martin Rinkart (1586-1649), expresses well the biblical message that even during times of plague, destitution, wars, and natural disasters we are called to worship and give thanks to the God of love and mercy, the God who, especially, never forgets those who are grieving and suffering. This is the God we praise and worship; this is the God to whom we express our deepest feelings of gratitude and thanksgiving.

when people are feeling particularly thankful. In a way, however, to sing the hymn only on special occasions is to miss an important point about thanking God. The faithful Christian is thankful (grateful) to God for all things, many of which we receive from God daily. Sometimes, however, we receive things we wish we had not received. For example, sometime you may receive a bad grade on a test; or perhaps after you applied for a job, you received a rejection notice. Most teachers know well the feeling of receiving a rejection notice from a publisher who has decided not to publish one's book or article. At such times, we may feel angry or disappointed; and probably, we do not feel like giving thanks for what happened. In 1 Thessalonians 5: 18, however, the Apostle Paul tells us to "give thanks in all circumstances, for this is God's will for you in Christ Jesus." Indeed, thanksgiving should not be expressed *only* when we feel happy about something we have received. We should also thank God when we have experiences we would rather have avoided.

There is another, very important point here that we should not miss. Being thankful to other people and being thankful to God are not the same thing. For example, being thankful to another person can sometimes be a burden. I am sure that each of us has experienced this. Sometimes receiving a gift from another person hurts our pride; sometimes it damages our feeling of independence. When we express our thanksgiving to God, however, there is no issue of selfish pride nor loss of

# ENGLISH CHAPEL SERVICE

文学部教授 David N. Murchie (マーチー, デイビッド)

**BIBLE READING** : 1 Chronicles 16: 34-36

Give thanks to the LORD, for he is good;

his love endures forever.

Cry out, "Save us, O God our Savior;

gather us and deliver us from the nations,

that we may give thanks to your holy name,

that we may glory in your praise.

Praise be to the LORD, the God of Israel,

from everlasting to everlasting.

Then all the people said "Amen" and "Praise the Lord."

## **SERMON : "Thanking God"**

Most Protestant Christians are probably not familiar with the book of *Ecclesiasticus*. It is not in the Protestant Bible. Nevertheless, it is a valuable book. It is a book rich with wisdom. For example, the hymn we just sang is based on a passage from the 50th chapter of *Ecclesiasticus*. It is a simple hymn. It is short, and its words are the words of common people. The words show the wisdom of an unpretentious celebration of Christian gratitude.

"Now Thank We All Our God" is often sung at special occasions (for example, at a Thanksgiving Day worship service)

## 編集後記

大学宗教主任 北 博

この一年は、長い東北学院の歴史においても特別な年となりました。二〇一一年三月十一日のあの地震と津波は、多くの尊い人命を奪い、私達がこれまで築き上げて来た多くの物を破壊しました。大学の在校生のうち、五名が犠牲となり、入学予定者の中からも犠牲者が出ました。大学は、三キャンパスともすべて、大きな被害を受けました。多くの学生や教職員も、あるいは地震や津波で家を失い、あるいは被害を受けて、避難所生活を強いられました。いまだに仮設住宅に暮らしている学生や、不自由な仮住まい生活を続けている学生、また福島原発事故のために先の見えない避難生活を続けている学生もいることも、忘れてはなりません。加えて、津波で家族、親戚、友人、近所の人を失い、あるいはその時の恐怖体験が忘れられずに、心に傷を負ってしまった学生も多いことでしょう。

多賀城キャンパスの礼拝堂は、災害発生後暫くの間、津波から逃れてきた被災者達の避難所として使われました。五月になってやっと授業が開始した後も、土樋キャンパスの礼拝堂は地震で天井が落下したために立ち入り禁止になり、教室で礼拝を行ないました。礼拝堂で礼拝が行なえ

るようになったのは、やっと秋になってからでした。泉キャンパスの礼拝堂も、オルガンが使えなくなつたため、暫く別のオルガンで代用しました。

このように、各礼拝堂とも初めてのことだらけの中で礼拝を続けました。ただ、このような中でも礼拝を欠かさず続けることが出来たのは、大きな意義があるのではないでしょうか。それは東北学院の伝統を守つたというだけでなく、どんな困難の中でも礼拝を中心にするという東北学院の断固たる意志を内外に示した、という意味においてです。願わくは神が私達のこの志をよしとし、私達に恵みを賜り、これからの東北学院の道行きを導いて下さいますように。今年も説教集が出来上がりました。神に感謝します。

# 大学礼拝説教集

第 十六 号

二〇二二年三月三十一日発行

発行責任者 宗教部長 佐々木哲夫

編集責任者 大学宗教主任 北 博

出版 社 株式会社 アクトジャパン

問い合わせ先 東北学院大学

宗教事務課

〒 980-8511 仙台市青葉区土樋一の三の一

☎ 〇二二・二六四・六四二八